
本格派魔法学園！！ファトシュレーン

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本格派魔法学園！！ファトシユレーン

【Nコード】

N4758B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

主人公はちよつと実力派主義な魔法学校に通う生徒。実家が貧乏なため家にお金を入れるために入学前に聞いた『魔法使いは金になる』という情報を信じて魔法の習得に励んでいる。しかし、数年経つてもなかなか高位の魔法を教えてくれないので最近魔法学校を辞めようかとも考えている。事件が起きたのはそんな矢先のことだった。魔法学校の数キロ先の丘に流れ星が落ちたのだ。魔法学校の高等魔法使い達が調査に向かうと、謎の魔物の群れと遭遇。学校の近辺ではみたこともない魔物達が街全体に襲い掛かる。そして主人

公の前にもそれらは現れようとしていた。

第1話くらきらお星様、大事件つれて前編

「君は、本当にこの魔法学校を辞めるというのか？」

「はい……」

一応悲しみを惜しむような目で、しかし顔でははっきりと辞める意思を目の前の大人達に伝えた。

「どうして急に辞めるなどというのかね！まだ新しいクラスに配属してから一ヶ月しか経っていないではないか。君は飛び級をするほど要領もいいし、実績もある。このまま突き詰めていけば賢者も夢ではないというのに」

「その賢者になるには一般に言う高等魔法の習得が必須……ですよ？」

僕の一言に僕の担任がうぐつと言葉を詰まらせる。

「本来なら五年は掛かると言われている大魔導師級に入ったのに一向に高等魔法の習得ができないのはどういうことなんですか？」

「……………」

「……僕がああクラスに行くのはまだ若すぎるから、でしょう？」

僕の言葉に担任を含めたその場の先生たちは何も言わない。いや、何も言えないのだ。だって、その通りなんだから。

「僕が大人になるまで高等魔術を覚えるのを待つ時間がないことは何度もお話したとおりです。少しでも賢者になるのを遅らせるわけにはいかないんです」

「そう言うがねセシル君。高等魔術の習得は思いのほか強い魔力と精神力がないといかん。そのための力量上げを本来ならここに上がってくるまでの約五年で養うものなんだ。それなしに高等魔術の習得をするのは自殺行為なのだ」

「しかし、そういう事例は聞いたことありませんけど？」

「私があると言ったらあるのだ！」

ついに僕に散々能書きを垂れた年配の先生が叫んだ。ついに本性

を表したな。最近、ほぼ毎日学校を辞める交渉をしに職員室を訪れているせいか、どのタイミングで先生が叫びだすのかも大体わかってきた。

今日はこれで潮時だろう。一応、僕が在籍している階級の主任である人を怒らせちゃったんだ。

職員室を出る直前、クラス担任が僕に「もう少し良く考えてみてくれないか」とまるで土下座でもしているかのような腰の低さで言う。僕はそれを適当にあしらひ、職員室を出る。

「ふう……」

学校から寮に戻った僕はそのままベッドの上にダイブした。ほんと、先生達とこういう話をするのは気が重くて嫌だな。僕だって本当ならあんなことは言いたくない。飛び級なんかしないでもつつくりこの学校で魔法を学んでいたい。いや、そもそもそんなゆとりがあつたのなら僕は今頃ここにはいないだろう。

僕がこの学校に入学したのは十三歳の時だった。僕には、とある理由で仕事をなくしてそのまま消息不明になってしまった父親がいた。家族を破滅に追い込んだ張本人にして、僕がファトシユレーン魔法学校に入ることになったきっかけ。そう、僕は本来家族を養う父親の代わりにお金を稼ぐために賢者になろうとしているわけである。

僕は一刻も早く魔法使いの世界では最上級であるといわれている賢者に上り詰めなければならぬ。そして、早くお金をたくさん儲けないといけないんだ。昔以上の大金持ちになろうとは思わない。ただ、あの頃の家族の輝きを、また母さんと妹が笑って暮らせる家族に戻したいだけなんだ。

コッソリ。

窓に何か小さなものが当たった。おそらく小石か何かだろう。そして、大抵僕の部屋の窓に小石を投げってくる人物といえば――

「おい、セシルウー！いるんでしょー！？」

（やっぱり……）

僕は小さなため息をついた。もちろん、このまま無視をする選択だ
つてあるわけだけど、このまま無視を続けるのは居心地が悪いから
つつい窓から見下ろしてしまうのだ。

「おー、いたいた。先生の言ってたとおりだね」

窓の下には茶髪の女の子が二人。一人は活動的なイメージを感じ
させるショートヘアで、もう一人はどちらかというと大人しめなイ
メージが伺える編み込みをいれたロングヘアだ。

「こんにちは二人とも。あんまり男子寮にいると危ないよ？」

僕がそう言っているのに、ショートヘアの娘は「だいじょーぶだ
つて」と明るく笑い飛ばすだけだった。まったく、いつもこうなん
だから。

「ちよつと待つてて、今行くから」

僕は少し曲がつっていた髪型を簡単に直して寮の階段を降りて外に
出た。

「お待たせ」

「ごめんねセシル君。お邪魔じゃなかったかな？」

ロングヘアの女の子がおどおどとした表情で聞く。

「いいや、特に何かしていたわけじゃなかったから」

「ほうらね、ノエル。あたしの言ったとおりでしょ？」

ノエルちゃんへの返答に「ほれみたか」と言わんばかりに胸を張
るノエルちゃんの隣にいるショートヘア……。

「どうせ退学が認められなくて部屋の隅で三角座りをしてうずくま
つていただけなんだから」

う、鋭いな……。

「もう、マリノつたら言いすぎだよ」

ノエルちゃんは少し怒ったような口調でマリノちゃんに言うが、
あまり怒ったように見えないため全然怖くない。

「いいんだつて。今日も駄目だったらしいじゃない？」

「……グラッツ先生に聞いたの？」

まあね、とマリノちゃんは頷く。グラッツ先生というのはここ、

ファトシユターン魔法学校の新任教師で僕の元担任で今はマリノちゃんと言エルちゃんのクラスを受け持っている先生だ。まだ二十五歳という若さのためか、とても生徒想いの先生でどんなに小さな相談でも親身になって聞いてくれる先生というよりはちよつとしたお兄さんみたいな感じの人なのだ。一見すると優男に見られがちなんだけど、ファトシユターンを首席卒業していて魔導師界でも若手ルキーなのだ。

「セシル君、どうしてもファトシユレーンを辞めちゃうの？」

ノエルちゃんが寂しそうな顔でつぶやく。

「うん、ここにいてもすぐに賢者になれそうもないしね。僕が賢者になる理由は二人とも知っているでしょ？」

僕の言葉に二人の女の子は顔を曇らせる。

「でもさセシル、あたし色々情報を調べてみたんだけど過去に賢者になった人達がお金持ちになったっていう事例はなかったよ？」

「私もグラツツ先生に聞いてみたけど、魔法使についての人は人のためにあるものでお金儲けのための存在じゃないって……」

「だけど、魔法使いの中にはお金を儲けている人もいるじゃない？」

「それはきつと外道魔術師のことじゃないか？」

建物の角から新たな人影がひよつこりと顔を出した。

「あ……」

「げっ」

その人物の顔を見るや否やマリノちゃんとノエルちゃんの表情がこわばる。

「寮長さん……」

「女の子の声が聞こえたのでおかしいなと思って様子を見に来たんだよ」

「す、すみません。すぐに出て行きますので」

ノエルちゃんが慌てて頭を下げる。

「ああ、そうしたほうがいい。生活指導の先生に見つかる大変だからな。まあ、学校ではできない会話だろうけどさ」

「……………」

マリノちゃんとノエルちゃんは寮長さんに小さく頭を下げると、僕にも一言別れの挨拶を述べて茂みの中に去っていった。

「すみません寮長さん…」

一応僕も謝っておくことにした。理由はどうあれ、何の警戒もせずに話していた僕も悪い。

「あの娘達、いつも君の事を気にかけてきている女の子達だよね」

「はい。一人は僕と同期の女の子でその時からずっとライバルなんです」

「そうなんだ。そりゃあ、君のこともよく知っているはずだよなあ」
寮長さんは羨ましげにつぶやいた。

「ところで、セシルは本当にここを辞めるのか？」

「…いつから知っていたんですか？」

「ずっと前、さっきと同じように君達が話しているのを聞いちゃったんだ。その時からかな」

なんだ、そんなところから既に知られていたのか。じゃあ、取り立てて隠す必要はないかな。

「僕は家族を養わないといけないんです。うちには父親がいないので僕がお金を稼がないといけないから」

「だから賢者になろうとしていたわけか。しかし、さっきも茶髪の女の子達が言っていたように賢者になってお金儲けをした魔術師はこの学校からは出ていないよ」

「それでもお金を儲けられることは事実なんですよ？ だったら僕は賢者にならないといけない。たとえ魔術師界に汚名を着せることになっても家族が笑って暮らせるのならそれでいいんです」

僕の言葉に寮長さんはすっかり黙り込んでしまった。このままでは気まずいので僕は話題を変えることにした。

「そつえば、さっき外道魔術師って言っていましたけど？」

「ああ、外道魔術師っていうのは言ってみれば人のために働くこと

を捨てた魔術師達の総称さ。その名の通り魔術師界の道から外れた奴らのことだね。治癒の魔法を使って人を助けるのに法外な値段を提示したりね」

「ひどいですね…」

「他にも禁忌や禁呪法にも手を出している者もいるらしい。魔術師協会も逮捕するのに苦労しているらしいよ」

「……………」

「家族を救ってあげることも大事かもしれないけど、俺としては君がそういう外れた道に行ってしまうのは止めなきゃいけないと思う。寮長としてではなく、同じ魔法使いの一員として」

「……」

僕は瞬間的に寮長さんが何を言っているのかわかった。僕が仮にそういう道に進んでしまったのなら寮長さんと真っ向から対決することになるかもしれないって事を。

「なあーんてな」

先ほどまでの真剣な表情を捨て去り、頬を緩めて寮長さんは笑った。

「正直、そうなったとしても俺が君を裁ききれるかなんてことはわからないよ」

「え？」

僕は寮長さんの一言に目を丸くした。

「君の家族の話は君のお友達との話を上からよく聞いていたから半端ないものだっていうことを知っているんだ。そう思うと、君を本気で裁ききれるかなんて僕にはわからない」

「寮長さん……」

「でも今話したことは覚えておきなよ。俺以外にも魔法使いはいっぱいいる。そいつら全員が君の事情を知っているわけじゃないんだ」

「はい……」

「わかればいいよ。じゃ、俺はこれで」

寮長さんは優しく微笑むと、角を曲がって建物の奥へと去ってい

った。僕は、今更ながら自分がしようとしていることがどれだけ重大なことを思い知らされた気がした。でも、それは寮長さんが言っていたように道はずした人の場合じゃないのか？僕の場合は別に禁呪法とかに手を出すわけではないし。そういうことさえしなければ外道とは言わないんじゃないだろうか。

僕は自分の部屋に戻ってからずっと寮長さんの言っていたことを考えていた。確かに魔法がお金を稼ぐための手段でないことは重々承知しているし、僕も講義でそう言った内容を聞くとたびに馬鹿なことをしている輩がいるものだと思っただけだった。けれど、それなら僕が目指しているものは何なんだ。結局、賢者になつてどうするんだ。賢者になれば母さんを、妹を救えるんじゃないのか？賢者って何なんだろう。僕は何のために賢者を目指しているんだろう。

「っ！！」

駄目だ、考えていても始まらない。こういう時は外に散歩をしいこう。外を歩けばきっと頭の中を渦巻いているもやもやも解消できるぞ。

僕はずつと着たままだった制服から私服に着替えると外へ出た。寮の門限はもうとつくに過ぎていたけど先生に見つからなければ大丈夫。僕はそろそろと足音を立てないように寮の外へ出た。

第1話くらきらお星様、大事件つれて後編

寮の外を出るや否や僕を歓迎してくれたのはまばゆいばかりの星空だった。ファトシュレーン魔法学校があるレアードの街は結構大きな街で、都市ともいえるくらいの規模だけど、星空はとっても綺麗なのだ。都市っていうとどうしてもとごみごみしていて、夜でも星空の代わりに輝いているのは魔法で灯された人工の光だった。イメージが強いけど、レアードはちつともそんなことはなかった。こんな日には学校だけを散歩するんじゃないかってレアードの街も歩きたくなくなるなあ。

「そうだそうだ、そうしよう」

「わぁ！」

暗がりから聞こえた明るい声に僕は思わず声をあげてしまった。

「馬鹿！しー！」

向こうもこんなに驚くと思っていたいなかったのか、急いで僕の口を手を当てる。

「ま、マリノちゃん？」

ようやく僕は口を押さえているのが彼女だということに気がついた。

「ノエルちゃんも。どうしたの、こんな時間に？」

「え、えと…」

「セシルこそこんな時間に何しているのよ。男子寮は見つかったらやばいんじゃないの？」

「そうなんだけど、なんだか散歩に出かけたくなくて…」

「はぁ、何それ？」

「何それって、言われても…」

僕は返答に困った。

「まあ、いいや。散歩ならあたしらもついていってもいいよね？」

「え？」

「あ、連れて行かないならそれでもいいわよ。ただ、男子寮を管理している先生にあんたのことをチクリに行くからさ」

「マリノ、それを話して男子寮まで行ったら私達が逆にこんな時間に出歩いているって事で怒られるんじゃないの？」

「あ……」

「……………」

僕らの間に冷たい風が吹いた気がした。

「と、とにかくあたしらも散歩に行くの！ノエルもいいでしょ？」

「う、うん。私は別にいいけど……」

ノエルちゃんはそう言って僕のほうをチラリと見る。だが、僕としても断る理由は特になかったし、この二人といるのは好きだし――

「じゃあ、一緒に行こうか」

この場合はしょうがないよね、うん。

僕はマリノちゃんとノエルちゃんを連れての夜のレアードの街を散策しに出かける。

「この街ってさ、割合大きいほうだけど静まるのも早いよね。まだ夜更けには十分時間があるのに」

「でも、そのおかげで星が綺麗に見えるよ」

「そうだね。今日の星空は一層輝いている感じがするよ」

僕達はベンチに座って少し星を眺めることにした。

「綺麗ねえ」

「うん」

マリノちゃんとノエルちゃんはうつとりとした表情で満天の星空を眺めている。こうしてみると二人とも女の子なんだなって感じがする。そりゃ、もともと女の子なのだから当然と言えば当然なのだけど、いつも一緒にいるとそういうことってついつい忘れてしまいがちになってしまうものだ。

「あ、流れ星！」

ノエルちゃんが急にベンチから立ち上がって真上を指差した。

「どこどこ！？」

「え、え？」

僕とマリノちゃんがノエルちゃんの指差すほうを見上げる頃には流れ星はすっかりどこかに消えてしまっていた。

「あちゃあ、見逃しちゃった」

悔しそくにマリノちゃんは片手を頭に当てた。

「七色に光っていてすごく綺麗だったよ」

唯一流れ星を見れたノエルちゃんが嬉しそうに語る。

「え、普通流れ星って白く輝いているんじゃないかって？」

「あれ、そうだったけど、私が見たのは七色に輝きながら流れていたよ」

「じゃあ、ノエルちゃんが見たのはきつと珍しい流れ星だったんだね」

「そうなのかな？」

自分で言っておきながら首を傾げるノエルちゃん。やはり自分でも流れ星は白く輝くというイメージでもあったのだろうか。

僕らがそんなまったりとした会話を交わしていた時だった。急に街の外が明るくフラッシュした。それはまるで先ほどノエルちゃんが見た流れ星の光のように七色に輝いていた。

「ひゃあ！？」

「きゃ！？」

「わあ！？」

あまりの光量に僕達は思わず目を硬く閉じた。まばゆい七色の光はしばらくの間レナードの街一帯を明るく照らすと、徐々に強さを失っていった。

「大丈夫、二人とも？」

「あんまり大丈夫じゃない、かも……」

「うう、目がチカチカするよ」

二人はあまりの光量にまだ目を開けられずにいたが、外傷はないようである。いったい今のは何だったんだろう。何か嫌な予感がする……。

「きゃあああ！」

『！！！！』

ファトシュレーン魔法学校から上がった悲鳴。

「何、今の悲鳴！？」

「わからない。でも、学校のほうから確かに聞こえた」

まさか今の光が……？わからない、わからないけど、とにかく今はいなくなっちゃ！

僕は急いで学校に戻った。

学校に戻ってきたが、特に変わった様子はないみたいだけど……。

「セシル、あれ！」

マリノちゃんが指差したのはメインストリートの桜の木の奥だった。

「な、何だありゃあ……」

「どうして魔物が学校の中にいるの！？」

レアドの街にはファトシュレーンの先生達が張った対魔物用防御結界が張ってあると聞いたことがある。しかし、現に目の前にいるあれらはどう見たって魔物だ。遠目からではよくは見えないけど、この辺りではあまり見ない種類のようだ。どうする、このまま先生達が来るまで待つか、それとも。いや、後者の選択はあまりに無謀すぎる。いかにファトシュレーンが実技主義の魔法学校だといっても高ランクのクラスにならない限り魔物を通した実戦は行われない。だからこの二人を巻き込むわけにはいかない。

「何ボサっとしてんのさセシル！助けに行くよ！」

「ま、待つてよ！マリノちゃん達のクラスではまだ実技は……」

「そんなの関係ない！今は、魔物に襲われているあの子を助けるのが先だよ！」

確かに、魔物達は確実に彼らの中央にいる人との間合いを詰めている。このままじゃやられてしまうのはそう遅くない。それに、実戦をやったことのないマリノちゃんとノエルちゃんが戦線に立っているというのに僕だけ逃げるなんてかつこ悪い真似はできない。

「僕もやらなくちゃ！」

護衛術の授業で習ったことを活かすため、僕のポケットには常にナイフが携帯されている。

「二人とも、僕が魔物達を引き付けるから後ろから攻撃用の魔法を撃って援護して！」

「は、はい！」

「わかったわ！」

武器を持っていない二人を前線に出すわけにはいかない。なら、ここは僕が奴らの引き付け役になるんだ。

（幸い、母さん達の生活費をバイトして稼いでいるから忍耐力には自信がある）

「さあこい、魔物共！」

僕はポケットから取り出したナイフを構えながら頭の中で必死に護身術の授業内容を反復していた。幸い、魔物達は上手い具合に僕が引き付けた方向にやってきてくれたので後ろの二人も上手く魔法を使って順調に数を減らせてはいた。しかし――

「はあはあ……」

僕の体力は早くも限界に近づいていた。実践の授業も受けているとはいえ、慣れていないのと敵の数が多すぎるのは大きな誤算だった。それに敵もただやられるだけじゃない。時には僕や後ろの二人の隙を突く事だってあった。だけど、倒れるわけにはいかない。まだ、まだ先生達がこないから……。

「おいおい、そんな足取りでどうするんだ？」

「ぴギヤアー!!」

声と共に魔物の悲鳴が上がった。顔を上げてみてみれば体の中央を見事に槍で刺されている。ということはあの人は――

「フレッドさん!!」

叫んだのは僕ではなく後ろにいるマリノちゃんだった。フレッドさんは聖王都バレル騎士団の兵士の一人で、この学校の警備員として派遣されてきた人だ。ここだけの話だけどマリノちゃんは……と

今はそんな時じゃない。とにかく強力な助っ人が来てくれたことに変わりはない。

「襲われていた女の子は無事に先生方が保護した。後はこいつらを倒すだけだ！」

向こうでフレッドさんが叫ぶ。

彼には見えないだろうが僕は小さく頷くと、ナイフを持ち直した。結局、戦いの後半はほとんどフレッドさんに任せるといって形で終了した。はあ、襲われていた女の子も助けられなかったし威勢よく飛び込んでいった割にはかつこ悪い結末だったなあ……。

魔物の処理をしている生徒会の人達の横で僕はがつくりとため息をついていた。

「何ため息なんかついているんだよ？」

そう言っただけで後ろから肩を叩いてきたのはフレッドさんだった。

「フレッドさん、お疲れ様です」

「まったくだぜ。何かと思って警備室から来て見れば、いるはずのない魔物があんなに大量にいて、しかも戦っているのがお前らと来たものだからさらに驚きだったぜ」

でも、とフレッドさんはフツと口元を緩めた。

「サンキューな。お前らがある程度数を減らしてくれていたから俺も魔物達を全滅することができた。本当に助かったよ」

「いえ、それよりあの女の子は？」

「襲われていた女の子は今、マリノ達と一緒に保健室で手当てを受けているはずだぜ」

「そうですか、よかった」

「よくはないよ！」

ヒステリックな声をあげたのは男子寮の寮長さんだった。実は生徒会の一員でもあるんだよなこの人。当然、お咎めが来るのは覚悟していた。

「どうしてあれだけの大群相手に三人で、しかも実戦訓練を受けていない二人を巻き込んで戦ったりしたんだ！結果は目に見えていた

だろう」

「すみません」

「まったく、君達に何かあったら俺らの責任でもあるんだからね。先生達からもきつくお灸をすえてもらうことだ。フレッドさんもお疲れ様でした。では、作業があるので僕はこれで」

寮長さんはまくし立てる勢いでそう言うと、形式的に頭を下げてさっさと現場に戻っていった。

「……………」

「そんなにしょげるなって。今は事件の後処理でピリピリしているだけだ。お前達のしたことは認められることではないけれど、あの子を守れたことは変わることのない事実なんだ。もっと胸を張って」

「……………ありがとう、フレッドさん」

僕はフレッドさんに励まさせながら、生徒会の人達が行っている戦闘の後処理をぼんやりと見ていた。結局、僕達のやったことは正しかったのかな。普通だったら正しいはずなのだから怒られるのはやっぱり釈然としなかったし、それなら何でもっと早く来てくれなかったんだろうとも思ってしまう。だからフレッドさんが来てくれた時は本当に泣きそうになった。これが本当の戦いなんだあ……………。

第2話　助けたあの子は天才児　前編

せつかくの清々しい朝なのに僕の耳元では口やかましく声を荒げている一体の人形。

僕がその頭を右手で叩きつけるように押さえると、さっきまでうるさかった声がしんと静まり返る。このまま再びまどろみの中に溶け込んでいく――

「……わけにはいかないんだよなあ」

僕はベッドの布団に包まりながらため息をついた。昨日、あれだけ動いたものだから正直まだ眠くてしょうがない。あのまますぐに寮に返してくれていたらまだマシだったんだけど、そうは問屋が許さないとばかりに先生達に出くわしてそのままお説教を食らってしまった。おかげで僕が再び寮に帰って床についたのは日付をまたいだ後なわけだ。

とにもかくにもまずはこの眠気をどうにかしなきゃいけないな。

僕は部屋を出て洗面所へと向かった。冷たい水で顔でも洗えば少しは眠気が覚める……と思う。

「あ……」

僕は洗面所に入るなり思わず声を出してしまった。

「やあセシルか。おはよう」

寮長さんは爽やかな笑顔で挨拶をしてきたので、僕も何とか笑顔で挨拶を返そうとしたのだが、やはり口と顔を一緒についていかせるのには無理があった。それに鏡を見て初めてわかる自分の寝癖のひどさ。寮長さんはそんな僕を見て微笑していた。

「やはりあれだけ動いたらまだ眠いよなあ」

寮長さんは笑っているが、彼も昨日は僕らが闘った後の事件処理でてんでこ舞いになっていたんじゃないのかな。

「俺は生徒会の仕事もやっているからね。夜更かしは慣れているんだよ。でも、流石に昨日は少し肉体労働だったからちょっと眠いけ

どね」

それとなく聞いてみると寮長さんは笑ってそう答えた。

「昨日の事件のこと、何かわかりました？」

「うーん、これといったことはわからなかったな。稀に他の地方の魔物が大移動をすることはあるらしいけど、そういう時期ではないらしいし」

やっぱり昨日のあの流れ星が関係しているのだろうか。

「まあ、当分教職員達との会議は避けられないかな」

寮長さんは苦笑しながら「あれって眠いんだよね」と率直な愚痴をこぼした。確かに教職員との会議って聞いただけでげんなりしてしまいそうだ。

「ま、それでも街や寮の皆のために頑張るだけさ。セシルも昨日の戦いはよくやっていただけ、できるだけあいう行動は自粛してほしい。昨日も言ったように生徒達の安全を守るのも俺達生徒会の役目だからさ」

「わかりました」

「じゃ、俺はこれで」

そう言って寮長さんは洗面所を去っていった。うーん、今のお話だけで目が覚めたかも。

洗面を済まし、部屋に戻って授業の準備をする。

「よし、そろそろ行こうかな」

制服にも着替えたし準備万端……。

「寮生の皆さん、ご飯ですよー!!」

食堂のほうから聞こえるおばちゃんの声。そういえばご飯食べるの忘れていたや。

ファトシュレーンは実技重視、実力重視の魔法学校で他の魔法学校と比べると少々ランクは高い。何せ勉強ができて実力が追いつ

かなきやいつまで経っても下のクラスのままだからだ。上のクラスである程度の成果を収めないと降級なんてことだってありえるところはまるで実社会のようにシビアだ。

魔法学校にはどの学校にも共通の階級があつて僕はその上から三番目の大魔導士の階級にいる。ちなみに賢者の階級はこの一階級上だ。賢者に進むには年に二回しか行われないテストの成績と賢者として習得必須の魔法を習得しておく必要がある。僕の場合、テストはともかくこの習得必須の魔法を全然習得させてくれないため試験を受けようにも受けられない状況にある。普通ならどんなにレベルの低い魔法学校に入ってもわずか三年で大魔導士の階級に上り詰めることなんてないし、先生達は僕みたいな若者が賢者になることを恐れて魔術を教えないだけなんだろう。きつとそうに違いない。でも、ならばどうして学校を辞めさせてもくれないんだろう。僕みたいな厄介者は早くいなくなればいいのにと思ふはずなのに。やっぱり、教師の考えることは生徒の僕にはよくわからない。

とにかく、今は魔術が習得できないんだからその分テストのための勉強に励まないと。実技が完璧でも勉強がおろそかだったらみっともないからね。

午前中の授業はほとんどぶ厚い教科書との睨み合いだった。もう慣れた……と言いたいけど、流石に大魔導士の階級までくると覚えなきゃいけない量が半端じゃないので頭はいつもパンク寸前にある。こんな時に気を紛らわせてくれるのは――

『もしもーし、聞こえるセシルー？てか聞こえてるでしょ、返事しなさいー！』

ほうら来た。お昼のこの時間になると大抵マリノちゃんからお誘いの念話があるんだ。大魔導士に上がってからは一層彼女のこの誘いが嬉しくならない日はなかった。

「はいはい、聞こえているよ。いつものとこでいいの？」

『あ、それなんだけど今日は学食でお昼にしよう。セシルに紹介したい子がいるんだ』

「紹介したい子？」

『そ。そういうわけだから今日は学食に来てね』

マリノちゃんは明るくそう言って念話を切った。

（紹介したい子、か…）

久しぶりに聞くフレーズだった。

今でこそ三人一緒にいるのが普通になっていたけどノエルちゃんと初めて会った時もマリノちゃんがこういう風に紹介したい子がいるんだとか言って僕を学食に呼んだんだっけ。ということはまた新たな獲物が——じゃなくて友達が——マリノちゃんの生贄に——いやいや友達の輪に——入ったんだな。マリノちゃんはある通り開けっぴろげな性格だし、明るいから友達を作るのが上手だ。学校の人達全員と仲良くなるのがマリノちゃんのここにいる間のもう一つの夢らしい。もし、それが叶ったならもつとマシな学校生活を送れるのかな。

少し出遅れたせいか、学食は既に教職員や生徒達で埋め尽くされていた。

（すごい人だな。マリノちゃん達はどこにいるんだろう？）

僕が辺りをきょろきょろと見回していると、不意に何かの気配を感じた。

「？」

おかしいな。確かに後ろに誰かがいて微笑まれたような感じがしたんだけど……。

「おい、セシルー。こつちこつち！」

ちょうど食堂の真ん中辺りでマリノちゃんが大きく手を振っていた。若干周囲の一目も気にしたほうがいいんじゃないのかなあ。

僕はそう思いながらも待たせたら悪いので真ん中のテーブルへと急ぐ。

「ごめんね、待たせちゃって」

「ほんとだよ。もうあたしお腹ぺこぺこだよ」

マリノちゃんは腹に手を当てて力なく言う。

「セシル君、この子はリプルちゃん。昨日、魔物に囲まれていたあの子だよ」

力なくテーブルに突っ伏しているマリノちゃんを横目で見ながらノエルちゃんが隣に座っている女の子を紹介する。背丈はノエルちゃんよりもさらに一回りくらい小さい。普通に考えたら……うーん、何歳くらいなんだろう。おそらく十歳前後だと思っけど。

「こんにちは、リプルって言います。昨日は助けてくれてありがとう。お礼が遅れてごめんなさい」

とても丁寧にその娘が言う。

「お礼なんて、そんなたいしたことはしていないよ」

「リプルちゃんはセシル君とおなじで飛び級してこの学校に入ってきたんだよ」

「そうなんだ。階級は？」

「高等魔術師の七級だよ」

「すごいじゃない！その年で高等魔術師なんて！ていうか君って何歳なの？」

「セシル君、女の子に軽々しく年を聞いちゃだめだよ……」

ノエルちゃんが控えめな声で僕にささやく。

「あ、その……ごめん」

「気にしないで。やっぱりこんなチビっこののが飛び級しているとよく何歳って聞かれるから慣れているの。ちなみに十三歳だよ」

「十三!？」

その背丈で——なんていうと張り倒されそうなので言わなかった。しかし、十三歳で高等魔術師の七級を取得しているとは。僕ですらけっこうハイペースで上り詰めているというのに、このリプルという子はさらにその上を行くのか。

「そんなに驚いてくれて話甲斐があるね、セシル君って」

えーと、それは褒められているのだろうか。僕的心情にまるで気づかずリプルちゃんは続けた。

「でも、セシル君だって飛び級をしているんでしょ。ノエルちゃん

達から聞いたよ。もう、大魔導師なんですよ？すごいなあ……」

リプレちゃんは素直に目を輝かせている。僕としては当然のこととしてやってきたことをこういう風に捉えられるのは少々照れくさい感じがする。

「僕の場合はすぐに賢者にならなきゃいけない理由があるだけさ」

「そうなんだ。どんな理由なの？」

「え？」

ある程度予想はしていたがやはり彼女は例外なくそこに突っ込みを入れてきたか。いや、大半の人は理由があると言われたらそれを聞きたがるだろう。しかし、果たしてこんな純粹そうな女の子に話せる内容だろうか。家族を楽にさせるためにお金を稼ぎたいからなんて死んでも言えない。

「えつと……」

「……………」

理由を知っているためかノエルちゃんも黙ったまま固まってしまっている。その横では沈黙を守ったままの僕と、ノエルちゃんの顔をきょとんとした表情で交互に見上げているリプルちゃん。

うーん、このまま気まずい沈黙が続くのはまずいよなあ。

「あゝもう皆話が長いよお！早くご飯にしようよー！」

ついに痺れを切らしたのかさっきまでテーブルに突っ伏していたマリノちゃんが上半身を起こして「ご飯ごはん」とわめきだしたので僕はひとまずお昼にするということで話を中断させることに成功した。

その後もずっと飛び級の話や授業の話にはならず、主にリプルちゃんの話題で昼休みを過ごすこととなった。

第2話　助けたあの子は天才児　後編

午後の授業も無事に終わり、ホームルームを受ければ生徒としての一日は終わる。部活には所属していないため、普段なら明日のための予習と今日の復習をしているんだけど、今日はバイトが入っているためそれは帰ってからということになる。今日は教会で子供達に読み書きを教える日だ。残念なことにレアードの周辺の村や町では孤児が生まれることが多い。せつかく授かった命を捨ててどこかへ逃げていくというのは僕には理解できない。両親達も相当思いつめて、理由もたくさんあった上での決断なのだろうけど、だからといって自分の産んだ子供を捨てるなんてその子の人生を溝に捨てるようなものではないか。僕は彼らにこの子達を思う心があるのなら早くこの教会に来てほしいと願っている。この子達だって自分を産んだ親と生活したほうが幸せになれる。たとえ、どんな理由があるうとも。

「お兄ちゃん、書き取り全部できたよ」

子供達に服を引っ張られ、僕はようやく正気に返った。

「ごめんごめん、それじゃ次は……」

僕は手を合わせて謝りながら子供達の相手をしながら読み書きを教えていく。やがて夕方になり、子供達と遊んでいると神父さんがやってきた。

「セシル君、毎週来てくれてありがとう。面倒見もいいし、子供達もすっかり懐いて

いるようだね」

「いえ、そんな。神父様のご苦労に比べれば……」

僕みたいに毎週のバイトではなく毎日この子達の面倒を見ているのだ。僕なんかよ

りずっと偉い存在だと思う。

「私はそんなに偉い存在ではないよ。好きだからやっている。ただ、

それだけのことだよ」

神父様はそう言って微笑みながら教会の外に顔を向けた。どうやら僕の迎えが来たようだな。

「やつほー、セシル」

「こんにちは、神父様」

「こんにちは、マリノさん、ノエルさん。おや……」

神父様の目が下に映る。

「そちらの可愛らしいお嬢さんは初めてですね」

「こんにちは神父様。リプルっていいいます」

リプルちゃんは可愛らしくお辞儀をした。

「セシル君がアルバイトをしているっていつからついてきたんだ。セシル君の働いているところが見たくて」

リプルちゃんはそう言って楽しそうに笑った。その後は女の子三人も加わって子供達と日が暮れるまで遊んでいた。

『！！？』

僕達はその一瞬の気配を見逃さなかった。

明らかな殺気！まさかまた……。神父様もそれに気づいたのか子供達をかばうように前に立った。

「皆さん、何かいます……」

神父様は声を押し殺して一言そうつぶやいた。次の瞬間、教会の扉が壊されて外側から内側に倒れた。外からは大量の魔物達……。

「やれやれ、こんな物騒なアルバイトを雇った覚えはないのですが

……」

「神父様は子供達をお願いします」

ローブの中から何かを取り出そうとする神父様の動きを遮りながら僕は静かに剣を構えた。昨日の今日だから一応護身用にショートソードは鞆に潜めておいたんだ。

「セシル君、リプルも戦うよ！」

リプルちゃんはきゅっと引き締まった顔つきで前に出た。顔に似合わず殴打用のグローブを武器にしているなんて意外だったけど、

高等魔術士なら戦闘訓練はうけているはず。

「無理はしないでね。じゃないと剣を持っている僕の顔が立たないからさ」

「えへへ、それはどーかなあ」

僕が冗談めかして言うとりプルちゃんは可愛らしく笑った。

「あたし達も参加するよ！」

そう言ってマリノちゃんが出したのは小さな簡易ロッド。ノエルちゃんも同じものを持っている。魔術師にとって筭は絶対になくてならないものだが、やむをえない場合は簡易型ながら魔力をあげてくれるロッドが重宝されるのだ。

「よし、行くよ皆！」

敵は昨日と同じ種類の獣型の魔物。若干、違った型もいるみたいだから注意するのはそこだけ。後は、リプルちゃんの動き次第だな。僕は前衛で剣と魔法を両立しながらリプルちゃんと魔物の両方に目を配った。リプルちゃんの動きは思った以上に鋭く、というよりすばしこく魔物を攪乱していた。さらに回復魔法が得意だったことにも驚いた。傷や体力を癒す魔法はそれなりの技術や知識が必要になるため得意としている者はファトシユレーンでも少ない。

魔物の数自体は昨日よりも少ないので全撃破はそうそう難しくなく戦闘は十分ほどで怪我人もなく終わった。

「おい、皆無事か！？」

新たな増援か、と思い構えた僕達の前に現れたのはグラッツ先生だった。

「先生！？」

「おお、無事みたいだな。教会周辺に魔物が現れたと聞いて急いできてみたが……」

グラッツ先生は教会の床に倒れる魔物の屍を見下ろした。

「腕を上げたな、セシル。マリノ達もよくがんばったな」

「先生……」

何だか急に体から力が抜けた。しかし、力を抜いている場合では

なかった。街中から悲鳴が聞こえる。まるで一つの合唱でもしているように。

「先生、これは一体どういうことなんですか!？」

「俺にもわからない。ただ、この辺りにはいるはずのない魔物が急に増えだしたんだ!」

『!?!?』

「俺はこれからそいつらを倒しに向かう。お前らは敵に気をつけながら学校に戻るんだ!」

「で、でも…」

「大丈夫だ!ちゃんと戻らないとおしおきだからな!」

グラッツ先生は吐き捨てるように叫ぶと、そのまま魔物と斬りあいながら街の外へと向かってしまった。僕達はその様子を呆気に取られた状態で見ているしかできなかった。

「いったいこの街に何が起こっているというのだ……」

だいぶ時間が経った頃、神父様がようやくつぶやいた。

街中が戦場と化した。

僕とマリノちゃん達はその光景を横目で見ながらグラッツ先生の言いつけどおりファトシユレーン魔法学校まで脇目も触れず走った。どんな状況であれ、実力者せんせいの言うことは絶対なのがここの掟だ。

リプルちゃんとの出会いがこんな戦場になるなんて僕は神様がいるのなら思い切り呪ってやりたい気分だった。

戦いは真夜中まで続いた。先生達や街に滞在していた賢者達が全ての魔物を討伐したが、民衆の不安は消えなかった。それはそうだろう。対魔物用の結界がこんなにもあっさりと突破されてしまうなんて今まで誰も思いもしなかったのだから。

僕達はこの先どうなってしまうのだろう。今は、それだけがごく心配だ。

第3話 大胆発言！魔法学校がコロシウム！？ 前編

会議室でその事件は起きた。

生徒副会長が両手でバンツとーブルを叩く。

「先生、今の提案をもう一度仰ってください？」

怒気を含んだ声でそう言いながら、提案者である老教師の顔を睨み付けた。

「相変わらず頭の固い小僧じゃな。もう一度だけ言うからよう聞けよ」

老教師はまたこいつかと言わんばかりにため息をつく。

「魔物の出所を掴む一時凌ぎとして、この学園全体をコロシウムにしようと言ったのじゃよ」

その瞬間、また生徒副会長が物申そうとしたが、間髪いれずに老教師は話を先に進める。

「ええか小僧、それから生徒会の諸君！教師陣の皆さんもよく考えてみるがよい。今、このレアドは危機に瀕している。これまでのような出来事が頻繁に起こっているから街の人々を助けに向かえんどこが実力派の魔法学校と言える！？高等魔術士ランク以下の生徒達は現に怯えてばかりであつたではないか。最近は落ち着いてきおるようじゃが、またいつ正体不明の魔物が街を襲ってくるかもわからない状態で我が校が何の対策も取れぬようでは他の魔法学校に示しがつかぬのではないか？」

「ですが、街の安全は現に今まで生徒会の我々だけで救えてきたじやないですか！それに生徒を守るのは生徒会の役目！他の生徒達までが戦いに参加したら我々の立場が…」

生徒副会長が苦し紛れの言い訳をする。

「阿呆が！この期に及んでまだそのようなたわけたことをほざくか！結局貴様は自分の立場に酔いしれ取るだけじゃろうか？」

凶星をつかれただけに副会長は齒軋りをしながら引き下がるしか

なかった。

「これからもあのような状態が続くと思えん。わしはあれはまだ様子見の段階じゃと思うておる。ただ群れをなしているにしては退きが見事じゃった」

確かに、と他の教師達が賛同する。

「ようはドクターの研究の手伝いを生徒にさせるということですよ
ね？」

教師陣の中では最も若いグラッツが今回の会議をまとめる。

「その通りじゃ。流石はグラッツ、物わかりがよいのお」

ドクターと呼ばれた老教師は満足そうに笑う。

他の教師陣も「やはり」「またか…」といった表情をしている。

「しかし、今回の現状を考えると承認せざるを得ませんね」

ずっと黙ったまま会議を見守っていた生徒会長がついに口を開いた。

「会長」と生徒会員達が声をあげるが、生徒会長は穏やかに微笑んだままだった。

「ドクター、私も貴方の案に賛同します。戦う以外にも生徒会の仕事はいっぱいあるからちようど人手不足で困っていたんですよ」

生徒会長は非常に柔らかな笑みを浮かべる。

「生徒会長の今の一言でこの会議の結論は決まったの。しかし、いきなり戦闘のカリキュラムを組んでも生徒はついてこないじゃろうから一度試験運用を試みたいのだが、生徒会の面々に依存はあるか？」

ドクターに誰も意見をするものはいなかった。

「アキト、お前に一つ仕事を頼みたいのじゃが…」

「何ですかドクター？」

アキトが怪訝そうにドクターの顔を見ると、彼は悪いことを思っていた子供のようににんまりと微笑んだ。

今日も目覚めの良い朝だ。

うーん、とっても清々しい。

何ていったって朝日が昇ると同時に起きたからね。

何でそんな早くに起きたのか？

それは、やっぱりこの間のことが引つかかっているからに他ならない。今のところ、あの日以来目立った襲撃はないものの、やっぱり魔物の侵入を防ぐ結界が役に立たないというのは痛い。

いざというときに自分の身を守るので精一杯では何のためにここにいるのかわからない。それに家族を救うのはお金の力だけじゃないんだ。こういう力だって、きつと必要になる。特に父親のいない僕の家族にとっては……。

「おはよう、セシル」

何故か玄関を開けると立っている寮長さん。始業時間まではまだだいぶ時間があるはずだけど……。

「もしかして、また生徒会のお仕事ですか？」

それ以外にないだろう。しかし、その問いに寮長さんは首を小さく横に振った。

「ここで待っていれば君に会えると思ってね。最近、早朝特訓をやっているらしいじゃないか？」

やばいなあ、ばれていたのか。寮の時間規制の中に朝の外出禁止については特にかかれていなかったから大丈夫だと思ったんだけどなあ。

「今日もいつものメンバーと？」

うわあ、そこまではれていますか。

僕は直感で悟った。

これはもう全てを話すしかない。そして、僕はあの日の翌日からずっとマリノちゃん達と早朝特訓を始めていることを話した。

「なるほど。でも、こういう仕事は……」

「わかっています。でも、生徒会の皆さんにいつも守ってもらえる

だけではこの学校にいる意味がないじゃないですか？」

「！！！」

「実力主義の学校なのに守ってもらってばかりなのはおかしいです。他の生徒達だって口には出して言わないですけど、そう思っている人だって少なくないと思います」

「……確かにセシルの言うとおりかもしれないな。でも、俺も含めて生徒会にはそういう風に思っていない人達のほうがまだ多い。彼らは彼らなりに自分の仕事を誇りに思っているからね」

寮長さんは顔からはわからないが、明らかに動揺していた。寮長さんもそれを悟られまいとするためか軽く会釈をすると、きびすを返して廊下の奥へと歩いていった。

「そうそう、言い忘れていた。セシル、今日の昼休みに君がいつも特訓をしているメンバーを連れてコロシウムへ行くように」

「え？」

「理由は俺も聞かされていないんでよくわからないが、とにかく行ってみてくれないか？」

「はぁ、わかりました」

僕のその一言に寮長さんは安堵の息を吐きながら優しく微笑んで今度こそ去っていった。一体なんだというのだろう。

とりあえず、このことは念話で伝えておかないといけないな。僕は今日の授業が移動教室ばかりなのをいいことに移動中に彼女らに念話をすることにした。マリノちゃんは怪しそうに、ノエルちゃんもかなり怪訝そうに、リプルちゃんは元気よく承諾してくれた。

「ふう……」

流石に三人に連続で念話するのはしんどいな。あと数分で授業が始まるにもかかわらず僕は近くのベンチに座りこんでしまった。

「大丈夫か、不良少年？」

「え？」

重い首をゆつくりと上げてみると、フレッドさんだった。

「おはようございますフレッドさん。不良少年は酷いなあ」

「不良少年じゃなきゃ、授業はさぼらないだろ？」

「今回は名誉の戦死ですよ」

僕が冗談交じりに口を尖らせて言うのとフレッドさんは優しく笑った。

「名誉の戦死の理由はお前が息を切らしているのとの関係があるようだな」

「ええ、三人連続で念話をしたんです」

「念話か。三人にしたのならもう魔法力は空っぽなんじゃねえの？」
「残り微かっところですかね？」

僕の現在の体調から考えるとそんなところだ。飛び級をすると、それだけ魔法力と魔力を養う期間が減ることになるから最終的に一階級ずつ上がっていった人よりも劣るのだ。

「何でまた三人も話したんだよ？」

呆れたようにフレッドさんは両手を腰に当てた。どうしよう、一応フレッドさんにもはなしておくべきだろうか。コロシウムってことは何らかの形で実技の試験が行われると予想しておいたほうがいい。何で僕らにだけなのは置いておくとして。

「へえ、緊急でコロシウムにねえ」

僕は結局フレッドさんに事のあらましを話してしまった。なんとなくだけど、これは僕らだけに関連するようなことではない気がする。寮長さんも半ば首を傾けながらだったし。

「もしかすると、この間のことについて何かわかったのかもしれないかもしれません」

「何だって！？いや、しかしそれだからってお前達を呼ぶ理由にはならないだろう？」

「そうなんですけど、魔物が現れた日に最初に戦っていたのは僕らだったらしいです」

「なるほど、事情聴取ってやつか」

フレッドさんの言葉に僕は小さく頷く。

「だからもし空いているのならフレッドにも来てほしいんです。先

生達も多分追い出しはしないはず」

「わかった」

フレッドさんは硬い表情で頷くと、また軽微の仕事に戻っていった。さて僕も授業に……。

キンコーンカーン。

「……………」

せっかく少し疲れが取れた矢先のチャイムだった。

第3話　大胆発言！魔法学校がコロシウム！？　後編

集合場所はコロシアムの中央闘技場。

全員揃ったというのに、まだ僕らと呼んだ張本人はきていないようだった。

「いったいどういつもりなのよ、人を呼んでおいて待たせるなんて」

案の定、マリノちゃんが文句を口にする。

フレッドさんも昼休みをだいぶ過ぎてから来たというのに、一向に呼び出し人の姿は現れそうにない。

「セシル君、場所は本当にここでもいいの？」

ノエルちゃんも不安になっているのか心配そうに僕に尋ねる。この学校にコロシウムは一つしかないんだから間違えようにも間違えられないと思うのだが――

「でも、人が来ないじゃんか」

マリノちゃんが不機嫌そうに言う。

「私、お腹すいたよう……」

リプルちゃんは可愛らしくお腹を押さえながら力なくつぶやく。

こんな無駄な時間を過ごすくらいなら僕もやりたいことがあるんだけどなあ……。

「おい、誰か来たんじゃないか？」

フレッドさんが何かの気配を感じたのかコロシアムの入り口を見つめる。

やっときてくれたか。一体、僕らと呼んだのは誰なんだろう？生徒会長さんか、それとも他の先生達か……。

答えは――

「グルルルル」

「フシユルルル」

答え、よだれをたらした魔物。しかも、一ヶ月前と同種の奴らが
十体強。

「うつそー!?!」

「ええー!?!」

マリノちゃんとノエルちゃんが慌てふためきながら叫ぶ。

「二人とも落ち着け! まずは近づいてきた奴から倒すんだ!」

フレッドさんが槍で魔物達を近づく魔物達を牽制しながら指示を
与える。僕らはその指示に従いながら魔物を一匹ずつ闘技場の地面
に伏せていった。この間より数が少なかったこともあり、僕らは特
に傷を負うことなく魔物の処理に成功した。それとほぼ同時に聞こ
えたやたらとばらついた拍手。僕達はそれが聞こえる方向に顔を向
けた。

闘技場の入り口にはいつから立っていたのか、お爺さんが一人立
っていた。

「階級的には外の魔物を交えた実戦訓練者が少ないというのにその
強さ…」

お爺さんはそう言って一步步僕らのほうに歩いてくる。最初は
逆光で見えなかった顔も徐々にはつきりとわかってきた。この人は

「さすがじゃな。改めて魔物を倒すのに階級など関係ないことがわ
かったわ」

『ドクターエックス!?!』

お爺さんの正体はこの学校の教師の一人で、ドクターエックス。
ちなみにこれが本名でないのは聞いてわかるとおりだが、彼は教職
員達も含めて自分をこの名で呼ばせているらしい。授業では魔法を
使った実験を担当していて、魔法の深いところを教えている。年齢
的にもこの学校の最年長であることは間違いないだろう。

誰もこの人に逆らっているところを見たことがなかった。しかし、
その人がどうしてこんな真似を?

まさかドクターエックスは――

「ドクターって実は魔物だったのー!?」

ちなみにそう突っ込んだのは僕ではなくマリノちゃんだ。

「違うわボケ!どこをどう見たらわしが魔物に見えるんじゃ!?」

「しわしわなところとか?」

あ、それは僕も常々思っていた。まあ、年齢を考えればあの位のしわで普通なのかもしれない。

「まったく、無礼な小娘じゃ」

ドクターエックスはどうやら本気で怒ったわけではないようだ。

愉快そうに鼻で笑うと、すぐに本題を切り出した。

「この間の生徒会教師対談でこの学校の学業システムを一時変更することになったのじゃ。その結果、今までは高等魔術師以降のクラスのみ対人・対魔物実戦訓練を取り入れていたのを全階級で取り入れることになった」

「ええ!?!」

「それってつまりあたしら上級魔術師クラスでも魔物を交えた実戦訓練をやるってこと?」

「そういうことじゃ」

「でも、どうして急に実戦訓練を?」

ノエルちゃんの言うとおりだ。どうして下のクラスにもそういうカリキュラムを取り入れたのだろう。

「理由はお主らも薄々感じているのではないか?十日前の謎の発光事件があつたからじゃよ」

やっぱりそうだったのか。

十日前のあの光が……だとしてもまだ一つだけ合点の行かないことがある。生徒会の人達がそれを快く了承してくれたとは思えない。「生徒会役員達の中には自分達の仕事が減るとかいった奴もおつたが、この学校の主義を忘れてはいかん。ここはファトシユレーン魔法学校!個人の實力向上こそを目的としている学校なのだ!」

普段は猫のように細いドクターの目がカツと見開いた。僕達はそ

のあまりの威圧感に圧倒されていた。しかし、それも束の間。ドクターエックスはにんまりと怪しげな笑みを浮かべた。

「小難しい話はこれで終わりじゃ。ファトシユレーンの若き警備員もよく付き合ってくれたの。わしはこれからもう少し魔物の微調整に入る。お主らももう解散してよいぞ。」

ドクターエックスは高笑いをしながら傷ついた魔物達と一緒に自分も転移の魔法で瞬間移動してしまった。

「いっちまった…」

フレッドさんは虚空をぼんやりとみつめながらつぶやく。事実、僕もまだ夢を見ているようではない。あの事件がまさか学校の方針そのものを変える事態になるなんて思ってもいなかった。

「それに…」

「魔物の微調整って何？」

「……さあ？」

ドクターエックスのすることは何年この学校にいてもわからないような気がする。

何だか今日はとても疲れた一日だった。

肉体的にも精神的にも。

あの謎の光のせいで見たことのない魔物は増えるわ、街は襲われるわ、拳句の果てには学校の方針すら変えてしまった。本当に僕らは一体どうなってしまうんだろう。母さん達のこともあるからこんな事件に巻き込まれている暇なんてないのに。そんなことをベッドの上で寝ながら考えていると部屋の外から窓に小石がコツンと当たるのだった。

僕は真っ暗な気配を殺しながら廊下を歩いて寮の裏口から外に出る。どうせこんなことをするのはマリノちゃんじゃないだろうと思っていたのだが、肝心の彼女の姿はどこにもなかった。いたのは

ロングヘアーに編み込みを入れた女の子…。

「こんばんは、セシル君」

「こんばんは、ノエルちゃん。マリノちゃんが一緒じゃないなんて珍しいね」

「うん。今日は…ね」

ノエルちゃんはその言ったきり次の言葉を口に出そうとはしなかった。普段しなれないことをしてまで僕のところにきたから何かあるのかと思っただけ……。

「今日も月が綺麗だね」

僕は気まずさに耐えかねてつい、そんなことを言ってしまった。

先ほどからノエルちゃんの表情が浮かないのはわかっていたから適切な話題ではないとわかっていたのに。しかし、ノエルちゃんは「綺麗だね」と言っただけで笑ってくれた。よかった、気を悪くはしていないみたいだ。少しきまずさがなくなってきたところで僕はノエルちゃんに改めて尋ねてみることにした。

「どうかしたの？何か不安なことでもある？」

「……不安なの」

僕の問いにノエルちゃんは月を見上げたまま震えるような声で答えた。

「ドクターエックスが言っていた新しいカリキュラムのこと。マリノは自分の実力を試せるって喜んでいただけ、私はまだ怖くてたまらないんだ。今までだって、セシル君やフレッドさんが支えてくれていたから魔物と立ち向かえた。私一人じゃ何もできなかった」

「それは僕だって同じだよ。いまだにあれだけの大群と何回か立ち向かって勝てた何て嘘みたいだって思う。今まで立ち向かえたのはマリノちゃんやノエルちゃん、皆で一丸となって戦ってきたからだよ。一人じゃ何もできないかもしれないけど皆で力を合わせたから今までやって来れたんだ」

僕の話にノエルちゃんは小さく頷く。

「これから皆で力を合わせて乗り切ろうよ。どんなことが起こっ

ても絶対に何とかなるから。だから、辛いけれど頑張ろう」

「うん、ありがとうセシル君。少しだけど何だか気持ちが楽になった気がする」

ノエルちゃん表情からまだ不安は完全に消え去ってはいなかったけど、そんな中で彼女は精一杯笑ってくれた。

僕もホッとした気持ちになれた。

この学校に通う全員に訪れる恐怖と不安、それらから逃げるのは簡単なことだ。でも、立ち向かっていくのは相当勇気があることだ。僕の励ましの言葉が少しでもノエルちゃんを楽にさせてあげられたのなら、明日から少しずつ頑張っていける。

そう僕は信じている。

第4話　またまた大事件！謎の機械とエセ軍人　前編

ファトシユレーン魔法学校に新たなカリキュラムが設けられてから数日が経過した。

魔物の出現傾向から考えて少数での戦闘訓練よりはむしろ多人数での戦闘に特化したカリキュラムが設けられた。もちろん、魔法学校であることを意識しているため相手と距離をおいての戦闘訓練が主である。しかし、選択項目として近接戦闘や遠距離武器の扱いなどを教える実技演習なども新たにカリキュラムに加えられ、魔法学校というよりはむしろ戦闘訓練校のようになりつつあった。

無理もないか、と思うけどこれでは僕が賢者になれる日はいつになるのだろうかと思えてしまう。もちろん、筆記に関しては勉強をちゃんとしているからそこは大丈夫だろう。ただ、賢者の試験を受けるために必要な必須魔術を覚えていない僕には賢者になるための試験を受ける権利がない。こんな事態だから先生達もいち早く僕の階級を上げてくれるかと思ったけれど、やはり世の中はそんなに甘くない。でも、今のまま僕が賢者になってもきっと人々に安息をもたらすことなんてできない。もちろん、母さん達を楽にさせてあげることも。僕はもっと強くなりたいといけない。

もっと、もっと……。

「あのお、先生？」

「うわ!？」

僕は思わず素っ頓狂な声で叫んでしまった。そういえば、今は授業の真っ最中だったんだ。

「すみません、ボーっとしちゃって。では、続きにいきましょうか」僕は苦笑いをしながら何事もなかったかのように黒板に文字を書き綴っていった。

キンコンカンコン。

授業の終わりを示す鐘が鳴り、僕は生徒達に頭を下げると教壇を

降りて教室を出ていった。ところでどうして僕が教壇に上がっていたのかというと、ファトシュレーンの教育カリキュラムが変わったことが大きな要因だ。僕ら生徒に事情はよくわからないが大幅な人事異動があったらしい。戦闘教育のためのプロフェツショナルを呼んだというのが第一の噂らしいが、今のところそんな先生を見たことはない。だから僕のような生徒でも魔法の知識に長けていればバイト生として教壇に上がるチャンスが得られるのだ。

こうして、学んだことを他人に教えることで自分の復習も兼ねるというわけである。

「すみません先生。ここのところがちょっとわかりづらいんですけど…」

後ろを振り返ると、教科書を開いたまま立っている女の子が二人。「ああ、確かにこの式は少々ややこしい部分がありますね。これは図解をしたほうがわかりやすくて…」

僕は魔法力を開放して作った擬似黒板にさらさらと教科書の式を写して解説をした。

「ありがとうございます。それにしても魔力が高いとこんなこともできるんですね」

どうやらこの二人の女の子は僕の力説も空しく魔法力を開放して作った擬似黒板のほうに夢中らしかった。

「魔法力の開放と基礎魔法の扱いに慣れてくれればすぐにできるようになりますよ。結構便利です」

そう言ってもう一つ二つパフォーマンスをしてみせると、女の子達は面白そうに拍手をしてくれた。

「随分とおモテになっているじゃない、先生？」

女の子達から解放されたかと思っただけならまたも後ろから、しかし今度は完全に見知った声が響いた。

「マリノちゃん！ノエルちゃんとリプルちゃんも」

「こんにちはセシル君」

「こんにちはー！」

ノエルちゃんは軽く会釈をし、リプルちゃんは元気よく笑って挨拶をする。

「セシルったらいつの間にバイトの数を増やしていたのよ？」

「こうすることで自分のためになると思ってたね」

「ほんと、真面目だなあセシルは」

「マリノももつと頑張ろうよ。この間の昇級試験もギリギリ落とさずに済んだんだから」

「うう、それを言わないでよ。まさかヤマが外れると思ってなくてさ。あれが当たっていたら絶対に四級以上に上がっていたよ」

「上級魔術師で必要なことは術式制御の理論だけなんだ。そこを完全にマスターしたら高等魔術師の仲間入りだよ」

「そしたら、マリノちゃんとノエルちゃんは私と一緒に級になれるね。がんばろー！」

元気よく腕を振り上げながら廊下を駆けていくリプルちゃん。そんな彼女を見てマリノちゃんは「素直な心っていいなあ」なんてつぶやいていた。

向こうではリプルちゃんが何かを叫んでいる。おそらく「早く学食に行こうよ」「みたいなことを言っているのだろう。

ファトシュレーンでの一日を終え、僕はいつものように教会で子供達に読み書きの授業を教えていた。

「セシル君、良ければお茶でも飲んでいきませんか？」

神父様の手には小さなポットが握られていた。そのまま子供達も混ぜてのお茶会が始まり、僕は至福のときを過ごす。

「最近、学校のほうでも動きを見せたようですね。いろんな人がこの街に訪れます」

「学校では謎の魔物達に対抗できるように魔法を使った戦闘訓練が新たに導入されました。でも、それとこの街に人が増えたことと何の関係があるのですか？」

「あれ、セシル君にはまだご存じないのですか？新任教師の方々がファトシュレーン魔法学校を訪ねてここに道を尋ねに来るのですよ」「そうなんですか。でも、今のところ僕の級の戦闘訓練では新任の人達に会ったことはないですよ」

もしかしたらマリノちゃん達は会っているかもしれないな。後で聞いてみよう。

「ところでセシル君、最近君の中の迷いが消えているように思えますけど何かあったのですか？」

「迷い……ですか？」

僕は首を捻って考えてみる。

最近あったことで特に迷ったことなんてなかったと思うけど。

あるとすれば一つ――

「学校でのストレスを感じなくなったかもしれません」

僕は思わずそう言ってしまった。決して間違っではないと思う。

「ストレスですか」

神父様は興味深そうに頷いた。

「僕の階級は今、大魔導師と言ってももう少しで最高の称号を得られるところまでできているんです。だけど、先生方が僕に賢者になるための試験を受けるために習得していなければならぬ魔法を教えてくださいませんか」

「それはどうして？」

「多分、まだ十六歳の僕が賢者になることが気に食わないんだと思います。ファトシュレーン魔法学校では十代で賢者になった人なんてあまり聞いたことありませんし」

「なるほど。君を妬んでその魔法を教えない、と？」

僕は神父様の言葉に大きく頷いた。

「なるほど、事情はわかりました。では、最近はどうしてそのストレスを感じなくなったのでしょうか？」

「それは、あの事件のせいだと思います。あの事件が起こってから戦いに参加するようになって、それで忘れていたんだと思います」

「そうですか…」

神父様は若干僕を探るような目をしていた。

やっぱり嘘をついたのがバレたのかな？

できるだけ平静を装って話したつもりだったけど……。

しかし、神父様は何も言わなかった。帰り際も「ストレスで苦し
くなったら相談しなさい」と言われただけだった。何にせよ、嘘が
ばれなかったのは良かった。僕がファトシユレーンを辞めてレナ
ーの街を去っていくと知ったらきっと神父様は残念そうな顔をする
に違いないからだ。

第4話　またまた大事件！謎の機械とエセ軍人　中編

僕は教会でのバイトを終え、ファトシュレーンの寮に向かって街を歩いていた。

「あれ、先生じゃないですか？」

先生という言葉に僕は一瞬反応した。自分ではないのは明らかなことだが、辺りを見回してもとても先生といういでたちの人は見当たらなかった。僕が周囲を見回しているのを見ていたのか相手は「やっぱり先生でしたな」と言つてと近よってきた。

「えつと君は……」

誰だっけ？とボケをかましたいのを必死でこらえて僕は一生懸命声をかけてきた女の子を思い出そうとする。

「今日の授業で術式読解のことを尋ねた者です」

ああ、あの女の子か。まさか臨時教師の僕のことを覚えてくれているなんて思っていなかっただけにちよつと嬉しかった。

「こんなところで会うなんて奇遇ですね」

「そうですね。ところでその格好は？」

実を言つと出会つたときから彼女の服装は気になっていた。ファトシュレーンの制服よりも地味だけど清潔感があり、胸元と頭のデカリボンがチャームポイントといえるだろう。

「や、やっぱり目立ちますかこれ？」

女の子は恥ずかしそうに顔を赤く染める。

「新らしく始めたアルバイト先の制服なんです」

「へえ、何となくお菓子屋さんみたいなイメージですね」

「わかります？実は、この先なんですけどちよつと寄つていきませんか？」

特に断る理由はなかったからついていくことにしたんだけど、よく考えたら男が一人でお菓子屋さんに入るのはちよつと抵抗がある行為だったかな。しかし、ついていくと言つたのだからここは腹を

くくろ。僕は前を歩く女の子の後ろをついて歩いていった……のはいいんだけどだんだん中央の商店街から離れていつているような気がする。

「ここです。さあ、どうぞ」

女の子はそう言つて先に入り口の奥へと入っていく。

「ただいま戻りました。卵と小麦粉を買ってきました」

「ご苦労様。それじゃキッチンに閉まつてきて……あれ、セシル君？」

「ノエルちゃん？」

意外なところで出会つたものだ。

どうしてここにノエルちゃんがいるのだろ。

今まで彼女からアルバイトをしているなんて話を聞いたことがなかったからてつきりしていないものだと思つていたのに。僕が訳を聞くと、ノエルちゃんは恥ずかしそうにここが自分の実家だということ告げた。

「私はずっとこのお店で育つてきたの。ファトシュレーンへもここから通つてゐるのよ」

「そうだったんだ。でも、たまに僕の部屋にマリノちゃんと来るときはどうしているの？夜遅いときもあるじゃない？」

「その時はマリノの部屋に泊めてもらつていたの。マリノってああいう性格だから一人でゐるのは性に合わないつて言つて」

なるほど、マリノちゃんらしい発言だな。

「あの、お二人はお知り合いだったんですか？」

「しまった。この娘のことをすっかり忘れていた。」

「長い付き合いだよ。もう二年半くらいになるのかな。セシル・マトレウス君。セシル君、この子は少し前からここで働いてくれているラウナちゃん」

「ラウナです。セシルさんつて言つんですね。よろしく願いします」

「こちらこそよろしくね、ラウナさん」

「セシルさん、私のことは呼び捨てでいいですよ。そのほうが親しみがわきますから」

「じゃあ、ラウナちゃんって呼んでいいかな？」

「はい」

ラウナちゃんは嬉しそうに頷いた。

「あらあら、賑やかだと思ったたらお友達が来ていたの」

お店の奥から出てきたのはノエルちゃん以上に穏やかそうな女性。

きつとノエルちゃんのお母さんだ。

「お母さん、こちらは私のお友達のセシル君」

「初めまして。いつもノエルさんにはお世話になっています」

「あらあら礼儀正しい男の子ね。ノエルにはこんなお友達もいたのねえ」

お母さんのこの発言から察するにノエルちゃんはあまり学校の出来事を話していないようだ。最近のことを話していないのはわかるけど僕とノエルちゃんが友達になったのはずっと前のことなのに――
「せっかくだから何か食べていったらどうかしら。ノエルいつも仲良くしてくれているからお代はいらないわ」

「お母さん……」

「ありがとうございます。でも、ちゃんとお金は払いますよ」

僕はノエルちゃんに適当に小さなお菓子を取ってもらって一口食べてみた。ラウナちゃん、ノエルちゃん、ノエルちゃんのお母さんの三人の視線が一気に僕に集まる。

「美味しい。すごく美味しいですよこのお菓子！」

フォークで切ったときの切れ具合、口に入れたときの甘い香り、口の中でふんわりと崩れていく。そして飲み込んだ後もしばらく口の中に残る甘い味は、思わず息をするのを忘れてしまいたくなるほどだ。

「これ、なんていうお菓子なんですか？」

「カステラっていうのよ」

ノエルちゃんのお母さんが説明をしてくれる。とある王国で日常

的に良く食べられているお菓子らしい。

「他のお菓子も食べてね」

「はい！」

僕はあまりの美味しさにしばらくはノエルちゃん達との会話よりも食べることを優先していた。

「本当に美味しかったあ。えっと、お代はいくらですか？」

そう言っただけ財布を取り出す僕の手の上にノエルちゃんのお母さんはそっと自分の手を乗せる。

「遠慮しないでいいのよ、サービスなんだから」

「ありがとうございます。でも……」

僕はこのことはあまり言いたくなかったが、言わないとお金を払わせてもらえそうにないだろう。

「僕はもうここで一時間以上居座っちゃってますけど、誰一人お客さんが来ないですね」

僕の一言にやはりノエルちゃんのお母さんは動きを止めた。

「失礼ですけど、あまり儲かっていらっしやらないのでしょうか。だったらサービスなんて言わないでお金を払わせてください。こんなに食べてタダにしてしまったことでお店がつぶれちゃったら僕が悲しいですもん」

「セシル君……」

「セシルさん……」

やはり言っただけいけないことを言ってしまっただけに店全体にしんみりとした空気が立ち込めてしまう。

「おお、そこにいたか！」

お店の扉を勢いよく開けて入ってきたのはフレッドさんだった。

「どうしたんです、そんなに慌てて」

「大変だ！街の外でへんてこな機械達が暴れているとの通報があったんだ。俺も急遽学校警備から出撃しなくてはならない。一緒に来てくれないか？お前達の魔法の力を借りたい」

なるほど。そういうことなら――

「行くよノエルちゃん!」

「ええ!」

「待ってください、私も行きます!」

「危険だからラウナちゃんはここにいるんだ!」

僕達を追いかけようとするラウナちゃんにそう叫び、僕は再び前を向いて事件の現場へと向かった。

第4話　またまた大事件！謎の機械とエセ軍人　後編

現場は謎の発光事件が起きた平原だった。何かが落ちたような跡があり、その周辺の地面の色だけ、周りと少し違っていた。

「こんなにひどいことになっていたなんて…」

本当にどうやったらこんなことになるのだろうか。

謎が多い事件にさらなる謎が積み重なっていく。

いや、今はそれを考えているときじゃない。

「あ、セシル君！」

向こうで手を振っているのはリプルちゃんとマリノちゃんだ。二人も現場に呼ばれていたのか。

「俺達が呼んだんだよ」

「寮長さん！」

「今は生徒会生活指導員だぜ。不本意だけど、俺達以上に戦闘に慣れているのは君や彼女達しかいないからな。向こうの集団は俺達生徒会メンバーで引き受ける。お前達は向こうで戦っている人の援護をしてやってくれ！」

「向こうで…って？」

僕が周囲を見回すと、銀色短髪の男が機械達と交戦している。

「あいつらか…」

「腕がなるね」

合流したマリノちゃんがパキパキと指の骨を鳴らす。

「フレッドさんはセシル達についてあげてください」

「おう！」

フレッドさんはそう言っつて腰の槍に手をかけた。

「よし、行くよ皆！」

『おう！』

僕はまず雷の魔法を機械達の中心に落とし、標的をこちらに切り替えるように仕向ける。いきなり戦場のど真ん中に雷を打たれたせ

いか、機械達の中で戦っている男が一瞬こちらに顔を向けた。

「早く僕達のほうへ！」

「援軍か。ありがたい！」

銀髪の男は僕達の雷魔法で後ろを向いている敵に銃を乱射し、包囲網を破った。

「セシル、俺達も一気に攻めるぞ！」

フレッドさんが槍を振り回しながら機械達の核を貫いていく。僕も負けてはいられないな。新たに覚えた武器への魔法付加術を使い、雷を剣にまとわせる。これでいくら装甲の厚い機械といえど大きなダメージを与えられる。

「てやあー！」

剣の切っ先が機械に当たり、そこから大量の電流が流れる。電気に弱い機械は一瞬にして機能停止する。

「ぬう、やりおるな。我輩も負けてはおれんぞ！」

銀髪の男も銃を使い、的確に敵の核を打ち抜く。今回は前衛要因が十分だからマリノちゃん達には補助にまわってもらったほうがいいだろう。僕は彼女達に僕達の回復に専念するように指示を出した。「彼のものの得物に新たな息吹を与えよ！ストロン！」

「生命の恵みよ、彼らに力を！ライフオーラ！」

次々と補助や回復の魔法を唱えるノエルちゃんとリプルちゃん。そして、魔法の詠唱を邪魔されないようにマリノちゃんが箒でしっかりと護衛をしている。あの三人のチームワークもだいたい決まってくるようになったな。

「セシル、後ろー！」

フレッドさんが横から叫ぶ。僕が後ろを振り返ったときには既に機械のアームが僕の体に伸びているところだった。

（やられる！？）

剣で防御することも間に合わず、あとほんの一瞬で僕の体に穴が開くところだった。

「……？」

しかし、いくら経っても僕の体に痛みはこなかった。

「油断大敵ですよ、セシルさん」

その声と共に僕に攻撃を仕掛けようとしていた機械がバラバラになつて足元に崩れ落ちた。

「君は、ラウナちゃん!?」

「ラウナちゃん!」

向こうでノエルちゃんも驚いた様子で彼女を見ていた。

「ひどいですよ。私だけ一人ぼっちで待たせるなんて。私だってフアトシユレーン魔法学校の生徒の一人なんですよ」

彼女は弧を描いた剣を綺麗に鞘に収めた。確か、刀とかいう東の島国特有の武器だったつけ。

「私も戦列に参加します。生徒会役員の一人として!」

ラウナちゃんは改めて刀を鞘から抜くと、景気づけと言わんばかりに近くにいた機械を先ほどのようにバラバラに切り裂いた。

「さあ、どんどこかかってきなさい!」

ラウナちゃんは声高らかにそう言うつと、残っている機械達を中心へと走つていった。まったくなんて怖いもの知らずな子だ。でも、また一人心強い仲間が増えたことに変わりはないな。

「このまま一気に機械共を蹴散らすぞ!総員、あの少女に続け!」

銀髪の男も意気揚々にラウナちゃんの後に続く。

「セシル、俺達も続くぞ!」

「はい!マリノちゃん達、後ろは任せたよ!」

「オッケー!」

マリノちゃんはぐつと親指を立てると、僕達の後ろを走つて援護に回った。

戦いは夜が少し深まるまで続いたが、七色に変化した丘での戦いは僕達の圧勝で飾られた。ラウナちゃんは戦い終わつてすぐ、寮長さんに連れられて生徒会の仕事に戻つていった。

「大丈夫だった?」

リプルちゃんが銀髪男の傷を癒しながら尋ねると、彼はふんつと

鼻で笑った。

「このくらい何でもないわ。戦士養成学校で鍛えていたからな」

「戦士養成学校？」

聞きなれない言葉に全員が首を傾げる。そして、僕の中にはある疑問がよぎった。

「貴方は新しい戦闘実習の先生じゃないんですか？」

戦士養成学校なんていうからにはてつきりそうだと思ったのだが、今度は逆に銀髪男が首を傾げた。

「何のことだ？我輩は養成学校の命に従い、ファトシュレーンで魔法を学べと言われたのだが……？」

「え？」

「まさか……」

「ていうか明らかに……」

みんなの言いたいことは大体わかつている。だって、この人の外見はどうみたって熱血体育教師みたいに筋肉隆々だし、服装も戦士養成学校という名だけあって軍人っぽいというか……とにかく全員がファトシュレーンに新たに赴任した先生だと勘違いしていた。

「ハッハッハ。というわけでこれからよろしく頼むぞ。同じ学び舎にいれば顔くらい合わすこともあるう！その時は気軽にギルバートと呼ぶがいい！我輩は貴様らのことを気に入った！」

ギルバートは戦い終わった丘で僕達には騒音としか思えないくらいの大声を出して笑い続けたのだった。

これは新しい仲間が増えたって言えるのかなあ……。

とにかく、明日からは一段と学校が賑やかになりそうそんな予感がした。

第5話　迷惑上等！ギルバート奮闘記！　前編

「それでは今日はここまでです」

いつものように下級クラスの授業を終え、今度は自分の階級の授業へと向かう。

バイトで下の級の人達に講義をしてから自分が講義を受けに行くというのはなかなか慣れないというか変なものだ。さっきまで教壇に立っていたと思ったら次は生徒側の席に座っているのだから。自分でも思っけどなかなか忙しい奴だと思う。でも、教えたことのある下級生に出会ったまに挨拶をしてもらるのが嬉しい。自分の授業をちゃんと聞いてくれていてくれるという実感が湧く。

「あ、グラッツ先生こんにちは」

僕が挨拶をすると、グラッツ先生もすぐに気づいたのか「よお」と挨拶を返す。

「ずいぶんと重そうな荷物だな。図書館にでも行っていたのか？」

グラッツ先生は僕の手提げ鞆が大きく膨らんでいるのを見て言う。

「いえ、さっきまで下のクラスの魔法講義をやっていたんです」

「ああ、そういえば臨時バイト生の中にお前の名前もあつたな。職員室でも噂になっているぜ。俺達教師陣以上に教え方の上手い教師だってな」

グラッツ先生はおかしそうに笑った。

「一時はお前の退学騒動があつたけど、最近は落ち着いたのか？」

「それは……」

「……まだ決心は変わらないか？」

グラッツ先生の言葉に僕は重々しく頷いた。

「教師の立場からするとお前を失うのは惜しいんだよな。異例の昇級ぶりに驕ることもないしな。腕を磨けばきっといい賢者になるだろうに」

「……すみません、先生」

「お前が謝ることじゃないさ。お前がそう決めたのならその道を歩むのもまたお前だ。それに生徒の生き方は尊重したいしな」

グラッツ先生は優しく笑った後にため息混じりに「だがな」と続けた。

「お前の走ろうとしている道はいずれ俺達を敵に回すかもしれない。つてことだけは覚えておくんだ。よく考えれば俺達が対峙しなくてもいい方法があるかもしれない。あまり早急にことを進めて早まった真似だけはするな」

グラッツ先生は厳しい表情でそう言っただけで僕の肩を優しく叩くと、そのまま廊下を歩いていってしまった。

「いずれは敵同士……か」

信じられないけど、僕が進もうとしている道はそういう道なんだよな。

やはり納得がいかない。

どうして家族のためにお金を稼ぐだけなのに外道と呼ばれなければならないのだろうか。外道魔術師達だって中には僕みたいな理由があつて悪の道に身を染めている人達だっているかもしれないのに。そういう人達までひっくるめて外道なんて呼び方はどうかと思う。魔法は世のため人のためであれという言葉には共感するけれど、そういうやり口の魔法協会は嫌いだな。なんて愚痴を言ってもしょうがないけどな。

僕は自分自身を信じて前に進むだけだ。

「ええーい納得がいかん！」

「!？」

向こうから廊下を歩いてくるあの影は――

「ギルバート！」

「おお、セシルではないか。ちょうどいいところで出会った！聞いてくれぬか」

僕は腕時計をチラリと見た。

授業をサボってしまったけど形になるけどしょうがないか。ギルバ

ートはまだファトシュレーンに馴染めてないだろうから相談に乗ってあげたいし。そういえば、最近サボるということを覚えてきた感があるな。今までがむしろに走ってきた反動がここできたのか。

そんなことを思いながら僕は「どうしたの？」と尋ねる。するとギルバートが差し出したのはファトシュレーン初級魔術クラスの教科書だった。今、気づいたけどギルバートって追い回しは飛ばしているんだな。普通は、追い回しという見習い期間があるのに。

「教科書がどうかした？」

「この術式の読解がわからないのだ。我輩が通っていた戦士養成学校の魔術士達は皆、独自のやり方で魔法を学んでいたのにもかかわらず、ここはどうしてこんなややこしくて面倒くさい方法を取っているのだ？」

「ギルバートが通っていた養成学校の人達はどんなやり方をしていたの？」

「我輩には魔法のことはわからないが、もっとう、短く詠唱などをしていた気がする。少なくともこんな長ったらしいのを覚えてたり、唱えたりはしていなかった！」

おそらくギルバートの言っているのは魔法詠唱の省略のことだろう。
ショートカット

魔法を発動させるのに必要最低限の詠唱単語を並べて詠唱時間を短縮させ、魔法使いの弱点ともいえる詠唱中の隙をなくそうという試みだ。しかし、ショートカットにも欠点はある。必要最低限の詠唱単語しか発音しないため、同じ魔法力を使っても普通に詠唱するよりも威力がかなり劣ってしまうのだ。僕はギルバートにそのことを丁寧に説明して聞かせた。

「魔法使いが兵士として戦場に立つには隙が一番邪魔だからね。戦場での一瞬の隙は死を招く。だから、できるだけその隙を少なくしようとしているのだと思うよ」

「なるほど、しかし、戦場での魔法の威力はそれほどまでに差が出るのだろうか。前衛の補助ができればよいのではないのか？」

「それは大きな間違いだよ。確かに前衛の補助をすることが多い魔法使いだけど、魔法を自在に操れるようになれば、それこそ前衛が敵を一人倒す間に魔法使いは人まとまりの敵グループをやっつけることができるんだ。そのためには魔法の力を引き出すための詠唱が必要不可欠だ。ショートカットをすれば隙はなくなるけど、威力の面で大幅な差が生じる。前衛の補助程度ならそれでもいいだろうけど、ここは魔法を学び、そして魔法を世のため人のために役立てる場だからそんな妥協は許されないんだよ。ギルバートも戦士養成学校にいたのならわかるだろうけど、一人でも全力で戦っていない者がいれば戦局は大きく変わる」

「うむ、誠にその通りである。なるほど、魔法は単なる前衛の補助ではないということか」

「そういうこと。使い方一つで弱い魔法でも高ランクの魔法並の威力を発揮できる。詠唱はそのための基礎を作り出す大事な仕事なんだよ」

「そうか、我輩は向こうのやり方に囚われすぎていたのだな。礼を言うぞセシル。貴様のおかげで我輩はまた一つ世界を征服する力を身につけた」

「は、はあ……」

「ではさらばだ！」

ギルバートは僕に向かって敬礼をすると満足そうに去っていった。……ていうか世界征服って何？」

僕の問いに誰も言葉を返してくる人はいなかった。

その後もギルバートは何か不満があれば僕のところ相談にやってきた。不満が解消すると、彼は必ず「世界征服をする力をつけた」と言っ満足そうに去っていくのだった。

勉強面はそれでよかったのだが、問題は実技のほうにあった。例の事件があつたため初級クラスでも回数は少ないながら戦闘の訓練はコロシアムで行われる。しかし、その戦闘訓練の授業に問題があつた。

ギルバートはもともと戦士養成学校から来たわけだから訓練といえど、やるからには勝つことを目標としている。ところが、ファトシュレーンの実戦訓練は魔法と魔物の両方に慣れさせることを目的としているため、戦闘の勝ち負けが直接成績に響くことはない。如何に魔法を使つて戦局を変えることが出来るかを学ぶものなのだ。しかし、このギルバートと同じチームになつたほかの初級生徒達はその授業を境に戦闘訓練に出ることを拒むようになるという。

いったいどんなことをしてかしているのだろうと思い、いつものメンバーを連れて試合を見に行ったのだが、あまりの過激さに全員がしばらく呆気にとられて声を出せないでいた。まず、戦闘訓練では武器は魔力を高める効果のある筈のみに限定されているにもかかわらず銃を使う。チーム行動が主体なのにも関わらず単独行動をとる。ギルバートがミスをした時の被害が他のメンバーに及び、ひどい子は全治一ヶ月の傷を追つたらしい。

「流石にこれはひどいわね…」

「うん。それにギルバートさん、さっきから全然魔法を使っていない」

「あ、また一人倒れちゃったよ！」

リプルちゃんが指差したのは当然、ギルバートの味方である。足元に放つた威嚇射撃が手違いで味方の足元に当たつてしまい、そのまま失神。

「こんな無茶苦茶な戦闘訓練は俺も初めて見た…」

フレッドさんも口をポカンと半開きにしたまま固まっていた。

のんびりと観客席で観戦している僕達に早くとめてくれと言わんばかりに初級クラスの子達の視線が集まる。

「そろそろ、止めたほうがいいかな」

「そ、そうね。このままだと死人とかでそうだもんね」

マリノちゃんも小さく何度も頷いた。僕はギルバートの名を叫び、戦闘空間に割つて入った。事情を把握知っているためか戦闘教官も敢えて口出しをしたりはしなかった。

「セシル！？皆もどうしてここにいるのだ！？」

ギルバートが驚きながら銃を下ろす。

「お前の評判を確かめに来たんだよ」

「我輩の評判？」

「そーだよ！ギルちゃん、あれじゃあ魔法の訓練にならないよ！これは一応魔法を使った戦闘の授業なんだからね」

リプルちゃんが可愛らしく人差し指をギルバートに向けて抗議をする。

「それに、箒以外の武器は禁止されているはずだよ」

「それが我輩は納得いかないのである！」

「え？」

「戦場は常に生きるか死ぬかの場所。そのような場所に箒のような武器とも呼べないものを使うわけがなかるう！」

「確かに普通の戦場ならそうだろうけど今は違うでしょ！」

「否！実戦形式の訓練とはいえ武器とも言えないものを戦闘空間に持ち込むわけにはいけないのである！」

「あゝもう、聞き分けなさいよそのくらい！」

「貴様の頼みでも聞けぬわ！」

「ま、マリノ、少し落ち着いて…」

ギルバートに掴みかかるうとするマリノちゃんをノエルちゃんが必死に抑える。

「ここでの戦闘訓練は魔物を倒すことよりも魔法の実習が目的なんだ。だから武器も箒限定なんだよ。皆で力を合わせて倒さなきゃ」

「ふん、こんなレベルの低い者達とやっていては力にならぬ。我輩はお前達と組みたい」

「そんな無茶な…」

「ならば試してみてはどうじゃ？」

言葉に詰まる僕に助言するかのように闘技場の観客席から聞こえた声。

『ドクターエックス！！』

その場の全員が老人の名を叫ぶ。

「試す、というと？」

僕の代わりにフレッドさんが尋ねた。

「セシル、ギルバートがお前のパーティに入る素質があるかどうかをな」

「僕が？」

「そうじゃ。幸い魔物も若干残っておるようじゃし、そやつらとギルバートを相手に戦闘を行うのじゃ。ギルバートが戦闘不能になった時点でお前達の勝ちじゃ」

「へえ、面白そうじゃない。セシル、受けちゃいなよ」

マリノちゃんは俄然やる気にいる。

「ギルバートよ、お主が勝てば戦闘の訓練時のみ特別にセシル達パーティと実戦をすることを認めよう」

「その言葉に偽りないな、ドクターエックスとやら！」

いきり立つギルバートにドクターエックスは愉快そうに髭を撫で回している。

「そういうことだ。我輩達と勝負だセシル！」

はあ、どうしてこうなるんだろ。僕は考えた末に一つの提案をギルバートに突きつけた。

「僕達が勝ったらファトシュレーンのやり方で訓練を行うこと。それが守れるのなら相手になるよ。不本意だけど…」

「いいだろう。お前達が勝てば我輩は二度とこのような不祥事は起こさないと約束しよう」

「約束したからね？」

僕はギルバートとアイコンタクトを交わし、携帯用の杖を構えた。「皆、少しの間だけ我慢して付き合ってくれないかな。この埋め合わせはいつか…」

「わかってるよ。お前が悪いんじゃない」

「そーそー。悪いのはギルちゃんだもん。だからギルちゃんには…」

…いたーいお仕置き大作戦だあ！」

リップルちゃんは携帯用の杖を振り回しながら戦闘態勢に入った。

第5話　迷惑上等！ギルバート奮闘記！　後編

「行くぞセシル！」

臨戦態勢に入ったギルバートが銃を構える。

今回の闘いで自分の武器が使えるのはファトシユレーンの生徒ではないフレッドさんだけ。彼になるべく壁として動いてもらうのがいい策だろう。ギルバートに魔法の強さというものを教えてやるんだ！

「俺が前に出る。マリノ、補助を頼むぞ！」

「は、はいフレッドさん！」

マリノちゃん、フレッドさんの前だと本当に態度が変わるなあ。

それが戦闘に影響しなければいいけど。

そんな心配をよそに、僕は素早く魔法を詠唱して力の言葉を紡ぐ。

「ライトニングアロー！」

鋭い矢の形をした雷がギルバートの銃を狙う。

まずは相手の得物を落とす作戦だ。しかし、魔物が邪魔をしよう通りには当たらない。それに中途半端な威力だと魔物を怒らせてしまい、かえってこっちの戦況が不利になった。その度にフレッドさんが槍を使えてよかったと思う。

「ハハハ、セシルよ！大口を叩いた割には防戦一方ではないか！」

ギルバートの周りにはまだまだ魔物がいる。

くそ、何とかして魔物を避けて相手の銃を狙わないと。長期戦になって体力が奪われたところを銃で狙い撃ちなんかされたらたまったものじゃない！

ギルバートの銃の腕はピカイチで、ほとんどはずれることがない。一瞬の油断が命取りになる。

「セシル、ビビるな！魔法でしとめられなくても俺が何とかする！俺を信じろ！」

「フレッドさん……わかった！」

こうなったら駄目でもと！僕の魔法力が尽きるまでギルバートの銃を狙う！僕は力の続く限りアロー系の魔法を唱えた。矢の形をしているほうが発動が早く、素早い相手を捕らえるのにはうってつけだからだ。途中からリプルちゃんも参加してくれ、確率は一気に上がる。下手な鉄砲でも数を撃てば――

「当たるんだー！」

僕の最後の一発がギルバートの銃めがけて飛んでいく。幸運なことに魔物との間を縫ってギルバートとの距離を縮めたフレッドさんが盛んにアタックを仕掛けてくれていた。今ならすぐには魔法に注意が向かないはずだ。そして、僕の放った魔法の矢は見事に銃を持つギルバートの手に命中。カシャンという音を立てて銃が地面に落ちた。

「そこまでじゃ！」

ドクターエックスが観客席から審判を下す。

「この勝負はセシル達の勝ちじゃ！」

その瞬間、観客席や闘技場の隅で試合を見ていた初級クラスの生徒達が大歓声を上げた。

「ハアハア、何とか勝った……」

思いも寄らぬダメージを受け、さらに魔法力を使い果たした僕はその場に膝をついた。

「セシル君、大丈夫！？」

リプルちゃんが慌てて僕のほうに駆け寄ってくる。

「あまり大丈夫……じゃないかな。魔法力を使いきっちゃうなんて久しぶり……だったから……なあ」

僕の体は気がついたら宙を舞っていた。地面と空が逆さに映っていて、少し気持ち悪い。僕の視界はそのままゆっくりとフェードアウトしていった。

気がつく、僕はベッドに寝かされていた。

明らかに自室のものとは違って作りが簡素なため非常に寝にくい。ということまでここが保険室だということがわかった。ベッド横の窓からは心地よい風が吹いている。

「気がついたあ！」

リプルちゃんが僕の顔を覗き込んで嬉しそうに笑った。

「みんなあ、セシル君が起きたよ」

彼女のその一言で保健室が急に騒がしくなる。どうやら皆、最初からカーテンの向こうにいたみたいだな。

「おはようございます…」

僕がおどけて言う、とマリノちゃんが僕の肩に腕を回して軽く締め付けた。

「何がおはようございますだ。まったくあんたって奴は」

「いたたた。マリノちゃん、それ以上締めると首が折れる！おれ〜る〜!!」

「やかましい！散々皆を心配させた罰だあ！」

マリノちゃんはそう言う、と僕の首を今よりもっと強く絞めてくる。

「セシル君、本当によかった。私、死んじやったかと思って…」

ノエルちゃんは泣きそうな顔になっている。

「ノエルちゃん、皆も心配かけてごめん。久しぶりに魔法力を使いすぎたものだからちよっと体が持たなかっただけ。もう大丈夫だよ」

そういえば、僕が魔法力を使い果たした原因になったギルバートはどこにいたのだろうか。保健室に姿は見えないようだけど……。

「あんたを気絶させた張本人ならきつと保健室の外にいるんじゃない？」

「うん、ずっと保健室の前で座り込んで『何てことをしてしまったんだ…』てつぶやいてた。きつとセシル君が死んじやったって思っていると思うから早めにギルちゃんを安心させてあげて」

「融通利かずの堅物のくせしてそういうところは妙にナイーブだね。これじゃ怒る気もなれないよ」

そう言うマリノちゃんの表情が少し残念そうに見えるのは気のせいだろうか。まあいいや。ギルバートは外にいるのだったら少し話をしてこよう。僕は皆に一言断りを入れて保健室の外に出た。

リプルちゃんが言っていた通りギルバートは保健室の扉の横で三角座りをしながら何やらぶつぶつと独り言をつぶやいている。

「ギルバート？」

「ああ、我輩は何てことをしてしまったんだ。我輩が年甲斐も無くわがままなど言わずに訓練に参加していればこんなことには……」

「ギルバート……？」

「セシルよ、我輩は、我輩は貴様にどう償えばいいというのだ！」

「うーん、じゃあさっきの戦闘の勝敗条件にプラスアルファで学食一ヶ月間君のおこりでどう？」

「何を言うのだセシル。貴様はもう死んだのだ。死人が食事などできるわけ……うおおおお！」

廊下中にギルバートの野太い叫び声がこだまして、辺りの教職員を中心に視線がこちらに集まる。

「セ、セシル！？ 貴様、死んだはずでは……？」

「あの程度で死ぬわけないでしょ。魔法力が空になって気を失っただけだよ」

「な、な、な……。で、では貴様は最初から死んでなぞいなかったのか……？」

「そういうこと」

「……きくさくま。よくもこの我輩を騙したなあ！」

「別に騙してなんかないってば。君が勝手に勘違いしただけだもの。それより、さっきの約束は有効だね。僕に償ってくれるんだろ？」

「そんなものは無効だ！ 我輩は気分を害したので今日はもう帰る！」
ギルバートは頭から蒸気をたてながら保健室を去っていきこうとし

てふと足を止めると、不服そうにこうつぶやいた。

「今日の闘いは見事だった。貴様のおかげでチームというものを再認識することができた。約束どおり、これからは実戦訓練もこの学校の方針通りに受けることにしよう。文句はないな！さらばだ！」

まくしたてるように言うだけ言うと、ギルバートは今度こそ僕に背を向けて去っていった。もう一波乱起きるかと思ったけど、その心配はないみたいだな。ただ、ギルバートがすぐにファトシュレーンの考えを受け入れるとは到底思えないが。でも、これで一件落着かな。

「仲直りできてよかったね」

気がつくと後ろにリプルちゃんがいた。

「うん、これで少しでもギルバートがクラスに馴染めるといいなあ」

「だいじょーぶだよ。セシル君が体を張って説得したんだもん！きつと陰で努力すると思うよ。ギルちゃん、頑固だからなかなか上手くないかもしれないけど」

「違うじゃないね。じゃなきゃ、保健室の前で三角座りなんかしないよなあ」

「そうそう」

僕とリプルちゃんはおかしくなって笑ってしまった。

ギルバートがいたらどんな反応をしただろうなあ。

第6話　あの青空の下でもう一度　前編

ファトシユレーンの昼下がり、僕はいつものようにマリノちゃん達と学食で食事を取っていた。たまたま生徒会の仕事から解放されていたラウナちゃんとも合流していつそう賑わった時間を過ごした。「あ、ねえねえ知ってる？二、三日前にこの街にきた大道芸人の人達のこと」

マリノちゃんが言っているのはおそらく、二日前に街の広場で魔法を使った芸をやっていた人達のことだろう。

たまたま、その日は教会のバイトで勉強が終わった後に見に行こうとせがまれていたんだ。

「だいどーげー……てなあに？」

「魔法を使つて道行く人達にいろんな芸をして楽しませる人達のことだよ。リプルちゃんにわかりやすくいえば手品士みたいなものかしら」

「わぁ、手品！？」

ノエルちゃんの説明に、リプルちゃんの目がパアッと輝く。

「マリノちゃん、それって今もやっているの？」

「多分やつてると思うよ。学校が終わったら皆で見に行こうよ」

「面白そうですね。私も手品を見るのは初めてですし」

ラウナちゃんも興味深深に頷く。

「セシルも予定はないでしょ？付きあいなさい」

「マリノちゃん、僕にも拒否権つてものを作つてよ……」

「作つたらあんた、ずっと部屋で勉強しているって言つてしょ？だから却下！」

く、さすがが入学以来の友達だ。僕の性格を正確に把握している。ちなみに駄洒落ではないことを付け加えておこう。

「わーい、手品てーじな。楽しみななあ」

リプルちゃんが手放しで喜んでいる。一度見てはいるんだけど、

大道芸はその日によってやる題目が変わっていたりすることもある。それに、あの人達の大道芸はもう一度見ておきたいと思っていたしね。

手品はやる人達によっても様々だけど、基本的には魔法を使つて人々をあつと驚かせるものが多い。

一般的でかつ絶対に飽きることがないのが火の魔法を空中で爆発させて、色んな色を作り出す花火。様々な色や形で作られる花火は見ている者の心を沸き立たせるし、一度見たら絶対に忘れることはないほど印象に残る。

レアードの街に來た大道芸人達もそんな感じかと思つていた。しかし、僕が孤児院の子供達と見たのは心が沸き立つというよりもむしろ、逆に心を落ち着かせてくれる感じの芸だった。昼の中ほどから夕方近くまでその日はやっていただけ、人だかりが増えることはあつても減ることはなかった。街中が、あの大道芸人の人達に魅せられていた。

「おお、セシルではないか！いいところで出会った！」

「ギルバート！えらくご機嫌だね」

「ハッハッハ、実は戦闘訓練で我輩の使つた魔法が仲間の命を救つてな」

「へえ、それはすごいじゃないか。大進歩だね」

「うむ。仲間の連中とはまだ、あまり馴染めていないのだが、助けたそいつとは少し仲良くなれた気がして嬉しいのだ」

「そういうところから友情つていうのは始まると思うよ」

「そうだろうそうだろう。これで奴には一つ貸しができたというわけだ。ハッハッハ、今度は何を奢ってもらうかな！」

ギルバートはそう言つて勝ち誇つたように笑っている。

うゝん、ギルバートがあまり馴染めていない理由は彼自身の性格というよりもそういう戦闘での貸し借りがどのとかいう問題ではないのだろうか。毎回助けられるたびに奢らされては相手もたまらないだろうし。

もしかしくてもまだ前にいた学校の癖が取れていないのかもしれない。とすると、近いうちにまた一悶着起きそうな気がする。

「はあ、それは勘弁して欲しい。」

「ところでセシル……」

「何？」

「最近、街を巡回しているとなにやら人だかりができる時間帯があるようだ。何かあったのか？」

「ああ、それはきっと広場の人だかりのことだね」

「その通りだ。あれはいつたい何なんだ。歓声が沸いたと思ったら途端に静かになる時もあるのだ」

「レアドでは今、大道芸人が訪れているんだよ」

「大道芸人？」

ギルバートは聞きなれない言葉に怪訝な顔をする。

「魔法を使つて芸をしながら世界を渡り歩いている冒険者のことさ。旅先で芸を見せて路銀を稼ぐんだよ」

「芸というと、筋肉を見せ合ったりするあれか？」

ギルバートの目がギラリと輝く。何だか知らないけどあわよくば参戦しようとしているな。誤解をされる前に言っておこう。

「そんなんじゃないよ。魔法を使つて言つただろ」

「ぬ、そうか……」

ギルバートは残念そうに肩を下ろす。

そんなにかっかりするほどのものでもなかるうに。

「まあ、百聞は一見にしかずというしギルバートもよかつたら僕達と一緒に行かないか？」

「ふむ、興味があるし行つてみるとするか。魔法世界の芸とやらを見るのも大事な任務の一貫であるからな」

「じゃあ決まり。就業時間になったら学校の正門の前で待ち合わせだから」

「了解した！」

ギルバートは僕に向かって敬礼をすると、廊下を去っていった。

さて、僕も次の授業に行かないと。

第6話 あの世界の下でもう一度 中編

ファトシユレーンでの一日が終わり、僕は待ち合わせ場所の正門でみんなの到着を待った。

最初にやってきたのはリプルちゃんだ。よほど楽しみなのか、ポニーテールを揺らしながらスキップをしている。

「やつほー、セシル君！」

「やあ。ご機嫌だね、リプルちゃん」

「そりゃあ、もう。すっごく楽しみだよ」

リプルちゃんはそう言ってぴょんぴょんと跳びはねる。その笑顔を見ているだけで僕まで楽しみになってきた。

次にやってきたのはマリノちゃんとラウナちゃんだ。

「やつほー、マリノちゃん、ラウナちゃん！」

「リプルちゃん、ご機嫌だね」

「そりゃそうだよ。これから大道芸を見に行くんだもん」

「ねー！」

マリノちゃんとリプルちゃんが声を揃えて「いえーい！」と手を合わせる。

最後に来たのがノエルちゃんとギルバートだ。

二人ともどうやら掃除当番に当たっていて遅くなっただけらしい。ギルバートは掃除当番に対しては文句を言っていないが「掃除当番のせいで見れなかったら掃除当番表を破壊する」とか言っていたけど、それって微妙に意味ないか？

とにかくこれで全員揃ったので僕達はファトシユレーンを出てレナードの街の広場に向かって歩いた。

レナードの広場には既にたくさんの人ばかりができていたが、芸はまだ始まっていないようだった

「ラッキー！なるべく前のほうで見ようよ」

「わあ、待ってよマリノちゃん！」

リプルちゃんが後を追いかけてようとするが、背丈の差からどうやっても前にいる人に阻まれて前に進めずにいた。

「まったく……」

「はわあ！？」

それは僕にとってもリプルちゃんにとっても意外な行動だった。

あのギルバートがリプルちゃんを抱えて……。

（か、肩車！？）

今時、お兄ちゃんと懐く妹がいてもこんなシチュエーションは滅多にないというのに、何だこの微妙な空間は！

人だかりの中でがっちりとした極悪系顔の男に肩車された女の子。端から見たら誘拐犯にも見えそうなんですけど……。

しかし、ギルバートはそんなことはまったく気にせずぶっきらぼうに言った。

「これで見えるだろう？」

「う、うん。ありがとね、ギルちゃん」

「礼には及ばん。ほら、そろそろ始まるぞ」

ギルバートの言葉通り、すぐに芸が始まり、それまで騒がしかった広場が一気にしんと静まり返る。普通だったら、ここで団長みたいな人の挨拶とかあるんだけど、この人達にそういうものはない。

たった二人だからと言うのもあるのかもしれない。でも、すぐに芸に入ってお客さんを引き寄せられる力量があることから、素人の僕でも相当腕の立つ人達だとわかる。

最初の芸は氷の魔法を使ったミニオーロラだ。

僕自身オーロラというものを直接見たことはないんだけど、あの輝きはとても神秘的で思わず寒さも忘れてしまいたくなるくらいだった。そして、この芸もそれに負けていないくらいすごい。昼間の明るさだというのにこんなにもはつきりと幻想的な色使いができるなんて。氷の魔法を熟知していないとできないことだ。

操っているのは女の人だが、後ろの男の人が後ろで何かやっているのも気になる。次の芸は二人の立ち位置が入れ替わって男の人が

前に出て芸をする。男の人が不思議な歌を歌いながら指を弾くと、シャボン玉が次々と僕達の頭上に現れた。中には小さな花まで入っている。シャボン玉が弾けると、花がゆっくりと僕達観客の頭上に落ちてくる。

「その花は今日の演目を見に来てくださった皆様への感謝の気持ちです。どうぞお受け取りください」

シャボン玉が綺麗なら男の人の声もまた綺麗だった。研ぎ澄まされたテノールに前のほうにいる女性客達はうつとりとした表情になっていることだろう。

僕達は時間を忘れ、彼らが交互に出す神秘的な業の数々にひたすら魅せられていた。しかし、それを覆すかのように突如聞こえた「見つけたぞー！」という野太い声。

彼らの持っている物に観客達は「ひい！」と短い悲鳴をあげる。声だけでは微動だにしていなかった芸人達も流石に芸をやめて、そちらのほうに向き直る。

「やれやれ、また追ってきたのか……」

男性がうんざりした表情で後ろ頭を搔く。

「うるせえ！前に言っただけだぜ！借りを返すまではどこまでも追いかけていくつてなあ！」

「勇ましいことだけだいたい息が荒れていてよ？」

「う、うるせえ！とにかくここで借りを返させてもらうぜ！いくぞ、お前ら！」

『おおー！』

まずい、あいつら街中で無差別に人を襲うつもりだ！

「奴を止めるぞー！」

最初に飛び出したのはギルバートだった。

「お客さん！？危ないですよ！」

「待つてクルツ！彼らの制服、ちよつと形が違うものもあるけど、ファトシュレーンのものよ！」

「何だつて！ファトシュレーンの生徒か」

「その通りである！我輩以外の仲間達も向かっている！セシル！」
「げ、何で僕の名前を呼ぶのかなあ。まあ、無視をして逃げるつもりなんてさらさらなかったけどね。」

「おお、こりゃあすごい。頼もしい味方だぜ」

あのお、味方になった覚えはないんだけど……。

「細かいことはナシだよ！とにかくこの人達を助けよう！」

「そうですとも！街の安全を守る事だつてファトシユレーンの生徒として成すべきことです！」

ラウナちゃんも刀を抜いてすっかり臨戦態勢に入っている。

「なんだあお前ら！ガキのくせして大人の世界に首を挟むつもりかあ？」

「子供だからって甘く見ないでよね！せっかくの時間を台無しにしてくれちゃって！本気で怒ったんだからね！」

「へ、子供が怖くてヤクザがやってられるか！かまうことはねえ！こいつらもまとめて叩き潰せ！」

『おおー！！！！』

ヤクザ達はやる気満々だな。でも、魔法を使える僕達がヤクザを恐れる理由はどこにもない。

「皆、大事にならないようにさつさとかたをつけるよ！」

僕は広く散開する仲間達に向かってそう叫ぶと、自分も魔法の詠唱を開始した。

第6話　あの青空の下でもう一度　後編

まずは得意の雷系魔法をヤクザ達の足元に落として、相手の動きを止める。

「やるわね。基本がわかっているのね」
女の人が言った基本。

それは敵に囲まれたときはまず、片方の足止めから入れということだ。両側の一方を塞ぎ、残る一方に攻撃を集中して包囲網を破るのだ。

「そういうことでギルバート、君はこっち側の敵を…」

「フハハハ、久々の実戦である！我輩にひれ伏すがいい、腐れ外道共があー！」

ギルバートの乱射する銃が敵は愚かこっちまで巻き込みそうになる。しかも攻撃しているのは僕が指示したのと反対の方向だし。

キーン！

「こっちの足止めは私が引き受けます！」

そうだ、今回は刀を使えるラウナちゃんがいたんだ。

彼女がいてくれるのは戦力的に大きいな。

それに、大道芸人の二人もかなりの実力者だ。次々とヤクザ達を魔法でやつつけていく。

「フハハハ、死ねえ！死ねえー！」

「マリノちゃん…」

「あ、アハハ。なんだかんだ言っただけでギルの奴ノッているみたいだからちょっと攻撃力アップの魔法を、ね？」

「ね、じゃないでしょ！こっちまで巻き添えを喰らいそうなんですけど！」

「半狂乱状態だなあ、おい」

クルツと呼ばれた男性芸人も流石に呆れている様子だ。

「でも、数は確実に減っている」

確かに。

あれだけいたヤクザ達は半分以上が既に戦闘不能だ。殺してはいないと思うけど、ヤクザの大半をギルバートが倒しているだけにその保証がない。

「うぎゃあー！」

ノエルちゃんが放った氷の魔法を受けて、最後のヤクザが地面に倒れた。

「く、くそ！この魔術士きどりがあー！」

「きどりじゃなくて魔術士なんですけどお……」

ノエルちゃんがおどおどした表情で鋭いツツコミを入れる。

「ぐぐぐ……」

「おいドーマ、いきがるのもいいが、この状況をどう切り抜けるつもりだ？」

クルツさんが言ったとおり、僕とギルバートとラウナちゃんの三人はヤクザのボスを中心に円を描いている。

「ドーマ、お前の負けだ」

「少々この子達を侮りすぎたようね」

「く、くうー！覚えてやがれ！」

ヤクザのボスは武器を向けている僕達にきびすを返すと、何とも速いスピードで広場から去っていった。

「待て！」

「いいよ、追わなくても」

「え？でも……」

「あいつはいつもあの調子だから。俺達に因縁をつけては弱い下っ端を総動員してくるんだよ。ま、その度に俺とこいつで遊んでやっているんだがな」

何て人だろう。

追われている立場だというのに、愉快そうに笑っている場合か？

「まあ、でも今回は君達の助けがあったおかげでスムーズに、最善の方法で奴らを退散させることができた。ありがとう」

「たいしたことじゃないですよ」

マリノちゃんがヤクザの一人を軽く足蹴にしながらガッツポーズを作る。

「とりあえず遅くなっちまったけど自己紹介させてくれよ。俺はクルツ、見てのとおり大道芸人として諸国を渡り歩いているんだ」

「私はその相方をしているメリツサよ」

「メリツサは君たちが通っているファトシユレーンの卒業生なんだ。しかも首席で」

「ええ！？しゅ、首席！？」

僕もその言葉には相当驚いたが、一番驚いているのはノエルちゃんだった。

「クルツったら茶化さないでよ。それに首席と言っても別にずっとガリ勉していたわけじゃないよ。ただ、自分が探求しているものを追い求めるために毎日研究を続けてきたただけだもの」

「それが大道芸の道だったんですか？」

「ううん、本当は違うんだけどね。その過程で大道芸と出会って、クルツとも出会ったわけ。それでずっと彼と二人で芸人をやっているの」

「ちなみに俺は元から大道芸人になるつもりだったけどな」

クルツさんは微笑しながら言う。

「実はレアードに戻ってきたのも、謎の魔物が街に侵入したって言う噂を聞きつけてきたからなのよ」

「噂って、そんなに広まっているんですか？」

「まだそれほど遠くまで侵食しているわけじゃないが、いずれは聖王都バレルまで届くだろうな」

「でも、聖王都の調査隊の人達に調べてもらったほうがいいんじゃないかな。私達だけで手に負えることではないことはわかっていることだし」

「ノエルの言うとおりだけどさあ、それはそれで少しつまらない気がするなあ……」

「それに、生徒会の人達も先生方も負けず嫌いな人が多いですから
そう簡単にはいかないと思います」

「何にせよ、敵の出方がわからない以上は僕達としても手の出し
ようがないんです。クルツさん、メリッサさん、何か情報があれば教
えて欲しいのですけど」

「うゝむ、俺達も噂を聞きつけて来ただけだからなあ。メリッサは
何か知っているか？」

「ごめんなさい。私もまだ噂で聞いた程度の情報しかないわ」

「そうですか…」

何か情報がつかめればと思ったのだが、なかなかそうはいかない
か。少しでも早く街の人達の不安を取り除いてあげたいんだけどな
「でも、安心したよ。君達のような勇敢な子達がいてくれて」

「そうそう。一応は名の知れているドーマ達に一步も引かずに向か
つていくなんてたいしたものだぜ。これなら安心できるだろう」

「え？お二人とも一緒に戦ってはくれないんですか！？」

予想外の反応だった。僕はつきりこの二人もいっしょに戦って
くれるものばかりと思っていたのに。

「俺達にも仕事があるからな。メリッサもここに来てからずっと悩
んでいたが…」

「君達みたいな人がいるならわざわざ私が出て行かなくても大丈夫
だと思うよ。ただ、助けが必要なきはいつでも呼んで」

メリッサさんはそう言うと、代表者として僕に念話コードを耳打
ちして教えてくれた。わざわざ耳打ちしたのは盗聴防止のための阻
止だ。無論、ここにいる皆には知られてもいいことなのだが、念話
を扱うにあたって念話コードは必要以上の人に知らせてはいけない
義務がある。

「それじゃ、ここでの日程も終了したし、俺達は明日朝一で発つこ
とにするよ」

「残念だなあ。もっとクルツさん達の芸を見たかったのになあ…」

「気づいたのが遅すぎたものね。しょうがないよ、リプルちゃん」

「大丈夫さ。しばらくこの辺りを回ったらまたここに帰ってくるよ」
「ほんとに!？」

「ああ、君達は俺達の恩人だから一番前で見てもらえるように手配もするぜ」

「わぁーい、ありがとう!!」

「辛いこともあるかもしれないけど頑張つてね」

「はい。メリツサさんもお気をつけて」

芸に使った小道具を片付け終わった二人はそのまま宿屋に向かつていった。

「待つて!!」

マリノちゃんが急に背中を見せて歩き出した二人を呼び止めた。

「あの、クルツさんとメリツサさんはヴィクターさんって人を知りませんか!」

「ヴィクターさん?その人は俺達と同じ...?」

「大道芸人の人です!あたし、その人に弟子入りしたくてファトシユレーン魔法学校に入ったんです!何でもいいんです!何か知りませんか!？」

「うゝむ、同業者のことなら詳しいんだが、そんな名前の人は聞いたことがないな」

「クルツでも知らないとなると、相当無名人かその逆ね...」

「マリノさん、その人はどんな特徴をしているんだ?」

「えっと、確か髪の色は銀髪で背もクルツさんくらいあったと思います。あたしが幼かった頃でもけっこうなおじさんだったんですけど...」

「年配の芸人か。わかった、調べてみよう」

「ありがとうございます!もし、その人に会ったら伝えてください!『貴方が十年前に会った女の子は今、ファトシユレーンに通っています』って」

「了解。それじゃ、その人のことがわかったときもメリツサを通してセシル君に伝えるよ」

クルツさん達は今度こそ僕達に背中を向けて広場を去っていった。そういえば今、思い出したけどマリノちゃんはこの街に大道芸人が来るたびに今と同じ事を聞いて回っていた。よっぽど、その人のことが忘れられなかったんだろうな。

だって、マリノちゃんはその人を追いかけるためにここに入学したのだから。

「セシル、任務重大だからね！メリツサさんから連絡が入ったら、いの一番にあたしに連絡すること！約束だからね！」

「ああ、わかったよ」

大丈夫、きつとその人は見つかるよ。

マリノちゃんが、その人と同じ世界に立ち続ける限り。

第7話 ドタバタ、今日も生徒会は大忙し 前編

いつもの清々しい朝、僕がいつものように早朝特訓を終えて寮の玄関の扉を開けると柔らかい笑みをこぼして立っている寮長さんがいた。

「おはようございます」

「おはよう、セシル」

まずは何気ない挨拶。そして僕は気に掛かっていたことを一つ言っただ。

「前にもこんな風に待ち伏せをされていたような気がするんですけど」

「待ち伏せとは失礼な。まあ、でもそんなものかもな」

否定するのか肯定するのかどっちなんだろう…。

「また何かあったんですか？」

「ああ、これは君だけに向けての頼みじゃなくて、君の友人も含めて頼みたいことなんだが…」

「はあ、何ですか？」

「実は先日の教職員と生徒会との会議で明日から虹色の丘への調査に行くことが決まったんだ。謎の魔物達の出没は以前よりは表立ってないけど、それでもまだ街が被害に遭うこともある」

寮長さんの言うとおり、魔物達が群れで街へ侵入してくることは減っているものの、まったくないわけではなかった。

「それで生徒会役員の俺も当然調査に参加することになる。そこでまず君に頼みたいのはこの寮の管理のことなんだ」

「ああ、そういうことですか。なら大丈夫ですよ。寮長さんの仕事内容はよく見ていますから」

「セシルは常習犯だからな」

「でも、あれの大半は僕のせいではないんですけど」

「わかってるよ。でも、結果的にルール違反はルール違反だから」

ね。とにかく、そういう生徒がいたら注意をしてほしいんだ。あと、就寝時間が過ぎた後の応接間の冷蔵庫を使用する奴もいるからそれも注意してほしい」

「わかりました」

「まったく男っていうのは人の注意を聞かない生き物だからほんとと困るよ」

「ハハハ、すみません……」

「それともう一つはさっきも言ったように君だけにというわけではないのだが……」

ハア、何とも気が重い。

今日の授業はほとんど左の耳に入っては右の耳から抜けていった。クラスの皆からも心配されたり励まされたりもしたけど、それだけで元気が出るほど単純な悩みじゃない。これはいうなれば学校全体のことに関わることなのだ。

マリノちゃん達にも一体どう伝えればいいのだろう。

キンコーンカーンコーン。

おっとまずい。

次は中級クラスの講義に行かなくちゃいけないんだった。バイトだからサボるわけにもいかないんだけど、何か憂鬱なんだよなあ。

「というわけで、この術式が完成するわけです。しかし、僕も最近見つけたのですが、この術式は途中部分を省略することができまして……」

だいぶ術式の授業にも慣れてきたかな。自分が以前習ったところを復習する意味があることは前にも言ったとおりだけど、最近はそのにプラスアルファでちょっとした豆知識を教えることも多くなっていた。もちろん、公にばれてはいけなような豆知識は言わないけど、僕自身が何度も魔法を使って発見した術式の省略や詠唱の

省略などは皆にも教えてあげている。もちろん、いきなり省略はできないから魔法の練習は欠かせないことだけだ。

「先生、今日の授業のことなんですけど…」

こうやってラウナちゃんが授業後に質問に来ることも毎度のことだ。豆知識を教えることを始めてからは僕が教えている生徒のほとんどが授業の内容や豆知識について聞きに来るようになり、職員室を越えているんなところで噂になっているらしい。何だか照れくさい話ではあるのだが。

「ありがとうございました、先生」

「ラウナちゃん、もう教室には誰もいないんだから先生はよしてよ」僕が照れくさそうにそう言つと、ラウナちゃんは楽しそうに「それもそうですね」と微笑んだ。

「ところでセシルさん、アキト先輩から話は聞きましたか？」

「ラウナちゃんという『話』とはおそらくあの『話』のことだろう。ああ、聞いているよ。だけど、本当に僕達だけにこんな大役を任せてしまったいいの？生活指導の先生達に頼んだほうがよくない？」

「それでは生徒会の意味がないじゃないですか。それにセシルさん達だからこそアキト先輩も了承してくれたんですよ」

「ラウナちゃんはそう言つてにつこりと微笑んだ。

「既にマリノさんには念話で伝えていきますから今頃皆さんにも伝わっていると思いますよ」

確かに、噂好きのマリノちゃんなら噂の大小を問わず三日でファトシユレーン中に広まりそうだな。

『セシル、聞こえるー？』

噂をすれば当の本人から念話だ。

「マリノちゃん。お昼休みはあと一時間授業を受けてからだよ」

『うう、あたしもうお腹ペコペコだよ……じゃなーい！』

「あれ、違うの？」

『あんたあたしを何だと思つて…』

「ごめんごめん。それで、マリノちゃんが伝えたい内容っていうの

はもしかして生徒会についての話？」

『あ、やっぱり聞かされていたんだ』

「まあね。僕も正直驚いているよ。明日から生徒会に立ち代って学校の規律を守っていなくちゃいけないなんて」

『あゝあ、あたしマジで不安だよ…』

「一度、皆で相談したほうがいいよね」

『じゃあ、いつもどおり学食で集まる？』

「ああ、そうしようか。じゃ、またお昼に」

「昼休みに集まるんですか？」

話を聞いていたラウナちゃんの問いに僕は小さく頷いた。

「皆びつくりしているだろうからね」

「私も一緒にしてもいいですか？」

「ああ、そのほうが助かるよ。あと、できれば寮長さんから皆に話をしてもらえるようにも尋ねてみてくれないかな？」

「わかりました」

僕は次の授業もあるのでそこでいったん別れた。

昼休みになり、僕は皆との待ち合わせ場所の学食に向かうと、相変わらずマリノちゃんとノエルちゃんが一番乗りで席に座っていた。「ほんとびつくりしちゃうよね。あたし達がこんな立場に回されるなんてさ」

「うん。ファトシュレインの人達は皆個性豊かだからまとめきる自信がないよ」

ノエルちゃんは不安でいっぱいなのか顔色があまりよくなかった。

「生徒会とはどのような部署のことであるか？」

そう尋ねてやってきたのはギルバートとリプルちゃん。このペアもこの間の一件以来すっかり馴染んできたな。

「生徒会って、皆が学校で暮らしやすいようにすることでしょう？何かドキドキするよねえ」

この時点で楽しげなのはリプルちゃんだけのようだ。多分、子供だから生徒会っていう部署の重さをあまりよく知らないんだろうな

あ。

「皆さん、お揃いでしたか」

最後に食堂にやってきたのはラウナちゃんと寮長さんだ。ラウナちゃん、ちゃんとつれてきてくれたんだな。

「早速、明日の件についてお話したいんだけど、皆お腹もすいていることだろう。まずは食事をしてからにしないかい？」

「やったあ！さすが生活指導役員。わかってるう！」

マリノちゃんはそう言うと、真っ先にトレイをもって他の生徒の列に並んでいった。さっきまでの緊張感はどこへやらだ。

「寮長さん……」

「セシル、俺達も行こう。大丈夫、朝も言ったとおりそんなに大きい仕事を任せるわけじゃないから」

寮長さんは僕の肩を優しく叩くと、他の皆と同じようにトレイを持って生徒の列に並んだ。

全員が料理の入った皿を乗せたトレイを持って席に着いたところで、寮長さんが咳払いをして明日の仕事内容が言い渡された。

「君達にやつてもらう仕事は学校の平和を守ること」

実に単純明快な説明だけに僕を含む全員がホッと胸をなでおろしていた。

「内容を聞いて安心しているようだけど、全校生徒が二千人を超え、その年齢層も様々なファトシユレーンではそんなに楽な仕事ではないぞ？」

「寮長さんはそう言いますけど、僕達はもつと過酷でとてもじゃないけど生徒会の人達じゃないとできない仕事をやらないといけなのかと思っていましたよ」

「僕達でないとできない仕事なんていうのはないよ。生徒会の仕事だって、役員に選ばれれば皆しなければいけないことなんだから」

寮長さんは難しい顔をして言うが、やはり僕達全員の肩の荷が下りたことには間違いない。

「まあ身をもって体験して初めてわかることもあるだろう」

ニヤリと笑うアキトさんと、その横で心配そうな顔をしているラウナちゃん。明日になって、この二人の顔がどれほど恨めしいかを知ることになるなんて今の僕達には知る由もなかった。

第7話 ドタバタ、今日も生徒会は大忙し 後編

翌朝、僕は寮長さんを見送りいつものように早朝稽古へと出かけた……のだが。

「おいセシル、お前ごみを出し忘れただろ!？」

稽古から帰ってそうそう寮の面々から怒られた。

「ああ、そういえばそうだった!!」

寮のごみは街の掃除屋のおばさんが毎週決まった曜日の朝に回収して持っていくことになっている。

このおばさんがまた朝に強い人で六時には寮の回収ボックスからごみを回収していくのだ。そのため、寮長さんは遅くてもおばさんのくる三十分前には起きてごみを集めていた。

「ごめん皆! すぐにごみを集めるから! 部屋にあつたら持ってきて!」

「もう遅いつて。おばちゃんは十分前に帰っていったぜ」

「いいから! 女子寮も回るはずだからそのロス時間を使って追いついてやる!」

「わかったよ……」

男子生徒はめんどくさそうに舌打ちをすると全員に呼びかけてごみを集めさせた。その間に僕は食堂と応接間と洗面所のごみを回収しなくちゃ。

結局、女子寮を回っていた時間を有効活用して僕は校門前のところでおばちゃんに追いつき、無事にごみだしを終えた。

「っ、疲れた……」

ここでようやく朝のオアシス、朝食にありつける。そしていつもどおり食べ終えて部屋で今日の準備をしたまではよかったんだ。しかし、行く直前に食堂のおばちゃんに呼び止められた。

「セシルちゃん、今はあんたがアキトちゃんの代理で寮長をやっているんだろ?」

「そうですけど？」

「なら、どうして皆が食べ終わった後に来てくれなかったのさ。アキトちゃんならいつもあたし達の片づけを手伝ったり布巾でテーブルを拭いてくれたりしていたよ」

ここにもまた一つ落とし穴だ。そういえば、寮長さんはまめな人でこんなことまで手を回していたつけ。

「小さなことだけど、あたし達にとっては大事なことなんだよ。セシルちゃんも寮長を務めるならそれくらいしてほしいねえ……」

それから十分ほど、僕はおばちゃんの愚痴を聞き続けなければならなかった。

トホホ、何で朝からこんな目に……。

朝からこんな調子だった僕は学校でも同じようなミスを連発していた。たかが学校の平和と侮ったのがいけなかったのだ。僕は今になってやっと寮長さんの言っていた平和の意味を理解した。

平和とは単に生徒同士のトラブルのことだけを言うのではなく、学校の美化清掃、風紀。いろんなものが折り重なって初めて平和な学校生活を送ることができるんだ。

ああ、寮長さんのあの笑みが憎らしいほど恨めしい。

ファトシユレーン全体の平和を守るなんてとても五人でできることではないじゃないか！

昼休みに一回昼食のために集まったときもギルバートが鬼のような形相で「何度銃を乱射したかわからんわ！」と吠えていた。ノエルちゃんも午前中だけでほとほと疲れ果てていた。

「マリノったら都合が悪くなるとすぐ逃げるんだもの。おかげで全部私にとばっちりが……」

ノエルちゃんのことだからそのとばっちりを真面目に全部聞いていたんだろうなあ。

想像するだけで痛々しい。

「リプルちゃんはそれほどでもないみたいだね。ていうか今、僕達にくれたお菓子はどこからもらってきたの？」

「ふえ？これはね、あたしが『それはだめえ！』って注意すると謝りながらこれをくれたの。年上のお姉さんが多かったかなあ」

リプルちゃんは嬉しそうにそのことを語るが、それってあまり注意として聞き入れられてないのではないだろうか。完全におもちや扱いされていること請け合いだ。小さい子ってこういう時に得するから便利だなあ。実際、僕がリプルちゃんに『それはだめえ！』と言われて一生懸命に注意されたらお菓子は渡さないにしても謝りながら彼女の頭を撫でるだろう。あまりにも可愛いから。

というわけでリプルちゃん以外の四人がげんなりと貴重な昼休みを過ごす中、午後の授業五分前を告げる予鈴が鳴る。そういえば、今日はこれから上級魔術師のクラスに授業に行くんだっけ。

「今日はセシル君が授業をしてくれるんだよね？よろしく願います」

「こちらこそ。上級クラスの魔法実技授業を受け持つのは初めてだけど頑張るよ」

皆と別れ、ノエルちゃんと一緒に練習場に向かう。

「そういえばマリノちゃんはどうしようか」

「放つといていいよ。私を置き去りにして逃げたマリノのことなんか…」

うわあ、友情に亀裂が入っている…。

「セシル君、マリノの出席欄にはぜつつたいにマルを入れないでね！」

「は、はい…」

今日のノエルちゃん、何か怖いな。あまり逆らわないでおこう…。

「それでは魔法実技の授業を始めます。今日の授業の題目は『形』です。攻撃魔法を放つに当たっての注意点は相手がどの属性に強いか、あるいは弱いかを見極めることは前回の授業でお話があったことと思います。しかし相手に有効な属性を見つけたとしても、かわされ続けてはこちらの魔法力が尽きてしまいかねませんし、その隙

突かれる可能性も出てきます。それを補うのが『形』の変化です。攻撃魔法は垂れ流して放つよりも剣や槍、矢などといった形に変形させて放つほうが威力は上がります。例えば、さっき言ったように弱点がわかってもらわれてしまう場合は矢の形にして放つことで着弾までの速度が上がり、かわされにくくなります。今日は『形』にこだわって今までに習った魔法を練習してください。自分にあつた形を見つけるのもいい訓練になります。では、先ほど分けたグループに分かれて練習を開始してください。最後に班別で実戦形式の練習もしてもらいますからそのつもりで」

説明を終え、上級魔術士の人達がそれぞれに分かれて練習を開始する。懐かしいな、僕もこんな風に形を練習していたこともあつたっけ。勉強ならいくらでも本を読み直すことで復習ができるけど、さすがに実技は無理があるよな。生徒達がちゃんとやれているかどうかも見なければならなし、それに先生が勝手な行動をするわけにもいかない。

「あれ？」

全体を見回りながら一つだけ練習台が開いていることに気づく。

「ここで練習する班はいないのでですか？」

僕の問いかけにその隣で練習している生徒達が揃って首を傾げる。どうやら僕の振り分けミスの上だった。となると、ここで練習生徒はいないわけだけど……。

僕はチラリと隣からずつと並んでいる練習台で練習している上級クラスの生徒達を見た。真面目に練習している者もいればふざけている生徒も若干いたが、比較的熱心に練習に取り組んでいる。

（ちょっとくらいはれないかな）

大魔導士クラスではこのような授業はほとんどないから久しぶりに新鮮さを感じていた。

（どうしよう、ちょっとだけやってみようか）

いや、よく考えたら魔法を放つときには音が出るし、魔力の流れでわかってしまう。仮に制御したとしてもまず隣の練習台の人達に

はばれてしまう。

(うう、でもやりたいなあ…)

やる、やらない、やれば、やるべき、やったとしたら……。

『やれ!』

「!」

その瞬間、僕は自分が教える立場だということを忘れた。使い慣れている魔法を唱えて右人差し指に集中する。

「ライトニングアロー!」

僕の人差し指から放たれた電撃の矢はコンマ数秒というわずかな時間で数メートル先の的の真ん中を射抜いた。そしてハッと我に返ると、僕の奇抜な行動に生徒全員が注目していた。

しまった!しかも勢いで名前まで叫んでしまった。

ど、どうしよう。こんなことがばれたらクビになってしまう。生徒を放って魔法の練習なんてとんでもない怠慢だ。しかし、顔を真っ青にしている僕に飛んできたのは生徒達の感心の拍手だった。

「すっげえ!」

「先生、今の雷属性の魔法だね」

「矢の『形』でしたわね?」

「とてつもないスピードで的に当たったぞ!」

「隣で見てたけど、詠唱なんか一瞬だったぜ!」

「先生、やり方を教えてー!」

僕はあつという間に生徒達に囲まれてやれもう一度実演してほしいとか、今の魔法を教えてくださいだのとせがまれた。特に告げ口される様子もなさそうだったのでほっと一安心だ。

授業を終えてからも校内の掃除や見回りを皆と分担してこなし、何とか今日一日を乗り切って、僕は寮へと帰宅した。

寮長さんの部屋を訪ねてみたが、まだ帰ってきてはいないようだ。レナード全体を襲った事件を調査しているのだ。そうすぐには帰ってこないか。はあ、もうしばらくは体に鞭を打って働かないといけないのか。窓から見える太陽はだいぶ傾いてきている。今から部屋

に戻って寝るにしても中途半端になりそうだな。

「食堂にでも行って皿くらい並べてようかな」

特に何もすることがないのならそのくらいしてあげてもいいだろう。いつもやってもらっていることだから気がつかなかったことだけれど、とてもありがたいことなんだな。今日はそのことを身を持って実感した気がする。

第8話　賢者になること…

最近何かを忘れていた。

意図的に忘れていたわけではない。

一ヶ月ほどまえに街ごと魔物に襲われる事件があつて、それに巻き込まれていたから頭から一時的に切り離していただけた。だけど、僕が大きな事件に巻き込まれている間も、母と妹は苦しい想いをしている。レアードの皆の事はとても大事だし、三年間ここで家族のように親しくなった皆に別れを言わなくてはいけないのは辛い。でも、辛いのはほんの一瞬だと思う。なぜなら、次に会うときは僕達は敵同士になっっているはずだから。

僕はベッドから起き上がると、寮の最上階にある一室を訪れた。そこは男子寮の生活指導教員の部屋だ。この人のところにも僕は何度かファトシュレーンを退学するという相談を持ちかけにいったことがあった。生活指導には厳しく怖い人だけど、生徒の生活上の悩みには必死で相談に乗ってくれる。僕がグラッツ先生と同じくらい気を許せる先生だろう。

部屋の前に立つと、扉の向こうから明かりが漏れているのがわかる。大丈夫だ、まだ起きている。僕は部屋の扉を軽く二、三回叩いた。

「何だ、セシルじゃないか」

扉が開き、先生が顔だけをぬつと出してきた。

「どうしたんだ、こんな時間に。もう外出の時間は過ぎているぞ？」

寮の中でも…」

「先生、また少し相談が…」

先生の言葉を遮り、僕は言った。

「だろうな。じゃなきゃこんな夜更けに俺の部屋に来ないよな」

先生は苦笑すると、僕を部屋に入れてくれた。

教員の部屋は生徒の部屋より少しだけ豪勢だ。まず広さが違うし、

小さいながら個人用の冷蔵庫があるし、洗面台もある。まるで研究室のようだ。

「そこに座って待ってる。今、茶でもいれてやるから」

「どうぞおかまいなく」

「おかまいなくと言ったつてお前がここに来るときはいつつも日付を越えての座談会になるだろうが」

先生は呆れ混じりに笑うと、大柄な体とは裏腹に丁寧な手つきでカップにお茶を注いだ。

「それで、また例の話か？」

「その通りです」

「そうか……。ここ一ヶ月大人しかったから諦めたかなと思ったのは俺の思い違いだったか」

「それはただ単に話す機会がなかっただけです。レアードが魔物の襲撃にあつたことで学校のシステムもずいぶん変わってしまいましたから、それに慣れる時間も必要だったし」

「それに、お前はなんだかんだでレアードの襲撃事件の大きいものには結構関わっているものな」

「自分から首を突っ込んでいくつもりは一度もなかったですよ。ただ、僕を信頼してくれる人がいたから、その人達と一緒にならいいかと思っただけです」

「そうか……」

先生は会話に一呼吸おき、カップのお茶をすする。

「それで最近の襲撃も薄くなってきたから再びここに相談しに来たつてわけだな？」

「そうです。深みにはまる前になんとしてもここを辞めます。レアードのことが大事じゃないわけではないですが、こんなことをしている間にも家族は貧乏と戦っているんです。未成年の僕のバイト代だけじゃ満足に生活することなんてできない。そのためにも僕は早く賢者になって家族の元に帰ってあげないといけないんです」

「だが、賢者になるにはこれまで同様試験が必要だ。それに加えて

高等魔術の習得も条件となっている」

「……………」

「お前達がそれを教えてくれずにいるんじゃないか、てところか？」

「どこが間違っているんですか？」

「……お前、そのことを若さゆえの教師陣の妬みだと思っているんだってな」

「違いますか？」

「違うな。なら、うちの生徒会長はどうなんだ？あいつは賢者だが、年はまだお前と変わらない十八だ」

「あ……！」

「大魔導師になった時期こそお前より遅いが、結果的には十八で賢者になり後は卒業試験に合格すれば晴れて卒業だ。来年の春にはもうここからいなくなる。といっても彼女は優秀な人材だから教師側もそのままここに残そうとしている。彼女が今やっている研究は割と大掛かりなものになりそうだからな。サンプルも必要らしいからここがうつてつけだろう」

「……………」

「とまあ、こんなイレギュラーもいる。もしセシルが言ったとおりならば彼女こそ真つ先にここから除外されるだろう」

「ではなぜ僕にはあんな仕打ちをするっていうんです！？若さが原因でないのなら何が……！」

「それは、お前の能力が決定的に低いからだ」

「……！」

「確かにお前は飛び級もしているし学力・実力面でもまったく問題がない。しかし、それだけだ。お前はただ敷かれたレールの上をその通りに進んできただけに過ぎない。ファトシュレーンに限らず魔法学校に入学する者には何かしら理由がある。それは生徒会長のような魔法研究が多い。お前の身近で言うのならマリノ・オルスカーナはまだまだ伸びる生徒だと言えるだろう」

「マリノちゃんが……？」

「あいつがここに入った動機は確か、憧れている大道芸人に弟子入りするためらしいじゃないか。と、すると大道芸人になるにはどのような魔法の扱い方をすればよいのかを極めなければならない。お前は知らないようだが、あいつはそういう面ではいろいろと努力を重ね、たまに友人のノエル・ハミルトンに手伝ってもらって実験をすることもあるらしいぞ」

「え？」

そんなこと、マリノちゃんは一度だって僕に話してくれたことはなかった。

「それはそうだろう。彼女の実験ではまだ大道芸には程遠いからだ。彼女の性格を知っているお前ならわかるだろうが、きっと彼女は実験が成功した時点で友人達を呼び集めることだろう。楽しいことをして喜ばせるのが好きなマリノらしいやり方だろう？」

「……………」

「セシル、お前がここに入學した動機が不審だとは言わない。だが、家族を守ろうと急ぎ足でカリキュラムの階段を上るだけでは魔法学校というのは卒業できない。実力主義を重んじる我が校ならなおさらだ。実力にあわぬものは降級もありえるという我が校のシステムにお前が引つかかっているのが不思議なくらい、大魔導師級の主任は相当お前に期待しているのだろうな。だからこそ、急ぎ足で頂点を見極めた気になってほしくないのだ」

「そんな……。じゃあ間違っていたのは僕だということですか！家族のために魔法を習うのは間違いだというんですか！」

「そうは言っていないだろう！ただ、家族を守るといふ目的では急ぎ足になり兼ねないと言っただけだ」

「もういい！それ以上言わないでください！これ以上、自分がファトシユレーンにいる存在意義を否定されたくない！」

僕はそのまま先生の部屋を泣きながら飛び出した。

「ま、待ちなさいセシル！」

追いかけてようとするが、扉のすぐ脇にいた男に氣をとられて足を止めてしまう。

「グ、グラッツ先生……」

「先生の部屋が騒がしいと思ったので見にきたのですが、やっぱりあいつがらみでしたか……」

「ああ、今回はいささか俺も熱くなりすぎてしまったな。あいつの心を逆なでするような結果になってしまった……」

「仕方ないですよ。ダイゴ先生は本当のことを言っただけです。あいつがここにいる以上、学校を辞める辞めないに関わらずこの問題には直面したでしょう」

「……かもな。セシルの家族が苦しい思いをしているのは彼が入学してすぐに知ったが、こればかりは避けられぬ問題だ」

「ええ。賢者になりたいのならば、自分の探求する分野を持ってそれに向かって努力をすること、つまり自分のための目標が必要ですからね。マニユアルどおりに魔法を『習う』だけではそれ以上の進歩はありません」

「家族を想う心は素晴らしいことだが魔法使いの世界では生きにくいだろうな。しかし、どんな理由であれ彼が賢者を目指すというのなら我々はそのための努力は惜しまない。たとえ、憎まれ役に回ろうとも……な」

「ダイゴ先生はずっと変わりませんね。俺がいた頃のまんまで」

「そうか？お前が学生だった頃は今以上にうつつしい存在だっただろう？」

「タハハ、本当にお世話になりました」

「ま、そういう面倒を起こす奴のほうが俺は好きだがな。そういう奴に限って案外全うな方向に転ぶからな」

「俺がいい証拠、ですね？」

「おいおい、俺はそこまで言っていないぞ？」

「アハハ。それよりダイゴ先生、セシルのことなんですが、少し俺に任せてくれませんか？」

「うん？何か秘策があるのか？」

「秘策ってわけじゃないですけど、ちょっとした荒治療です」

グラッツはそう言ってにっこりと笑った。

ダイゴにはその目がまるで彼の学生時代を訪仏させているように見えたのだった。

第9話　大奮闘！高等魔法を奪え！　前編

気がつく朝になっていた。

僕はあの後、自分の部屋に戻ってきて泣いていて、気がついたら寝てしまっていたのか。

（かつこ悪いな僕…）

わかつてはいたんだ。クラスの皆が僕の友達が自分とは違う意味で素晴らしい目標を持って魔法の勉強をしていることに。だけど僕は……。

いや、何を言っているんだ。家族のためにお金を稼ぐことの何が悪いんだ。今はアルバイトを二つしかやっていないから母さんと妹を養うには心もとなさすぎるけど、賢者になればきつとすぐに裕福にしてあげられるんだ。そうだ、僕はそのために頑張らないといけないんだ。ダイゴ先生に正論を言われたから熱くなつて取り乱すなんて馬鹿馬鹿しい。相手が正論だろうとなんだだろうと、僕は僕の決めた道を進まなくてはいけないんだ。こんなところでしおれている場合じゃない。

「さあ、早朝特訓に出かけよう！皆、とっくに待っているだろうし」僕は急いで準備を済ませると寮を出た。

「おつそゝい、セシル！」

「どうしたのセシル君。いつもは一番に来ているのに…」

「いやあ、ちよつと寝過ぎただけだよ」

「アハハ、セシル君では寝ぼすけさんだね」

そういうリプルちゃんはまだ日が昇って間もないというのに元気だなあ。やっぱり子供らしく夜がきたらすぐに寝ているのかな。

「ところでセシル、我輩は昨日の夜中にお前の怒声らしきものを聞いたのだが何かあったのか？」

「やばいなあ、やっぱり下の階まで聞こえていたんだ…」。

「何々？セシルがどしたの？」

ノエルちゃん達と一緒に先に行っていたマリノちゃんがひょこつと首を出す。ほんとにこの人は隙がないなあ。

「なんでもないよ。ギルバートも、聞き間違えたんじゃないのかい？ 僕は昨日ずっと部屋にいたよ。そもそも一日生徒会の仕事を請け負ってずっとベッドの中だったんだから」

「ふむ、それもそうだな。我輩も昨日のはだいぶこたえたからな。もはや叫ぶ力も残ってはいないのが普通だな」

そうそう。簡単に信じてくれるところはギルバートも素敵なところだ。

これ以上話題が進展しそうになくなったので僕はホツと胸をなでおろした。あんなところ誰にも知られたくない。

早朝稽古を終えて、学校へ向かう。クラスのホームルームもいつもどおりのしょうもない諸連絡だけかと思いきや――

「セシル、少しいいか？」

なぜか担任に呼ばれた。

（何かしたっけ僕？）

何かしたことで怒られたり注意されたりするのなら昨日の生徒会の仕事のことがらいだが。

「セシル、放課後にマリノ、ノエル、リプル、ギルバートの四名を連れてコロシウムに来るように」

「コロシウムですか。何でまた？」

「その理由は放課後にコロシウム会場で話します。今は黙って従ってほしい」

「……わかりました。皆にも連絡をしておきます」

「頼むよ。これは君にとって重大な話になるだろう」

担任は真剣な顔でそう言うといふらついた足取りで去っていった。

（いったいなんだというのだろうか？）

僕の頭上にはたくさんのハテナが浮かんでいたが、自分にとって重大なことと言われればいかにわけにはいかない。

流石に四人に念話するのは体力的に問題があるので噂話が早い

マリノちゃんに念話で伝えてもらうことにした。

『連絡はわかったけどさ、何であんたの重大な問題にあたし達が借り出されるのよ?』

「そんなの僕だって知りたいよ。でも、放課後に全て教えるとか言っただけで話してくれなかったんだ」

『なあんかきな臭いなあ。いつかの時みたいにまたドクターエックスの実験台にされているんじゃないでしょうね?』

「可能性はあるね。でも、それだと僕にとって重大っていうことが意味をなさなくなるよ」

『あ、そっか』

「とにかく皆に伝えてほしいんだ。よろしく頼むよ」

『ちょ、セシル…!』

僕は一方的に念話を切った。

ごめん、マリノちゃん。だけど、理由がわからなくて混乱しているのはこっちも同じなんだよ。今はとにかく放課後を待つしかない。

時間は数時間ほど遡る。

早朝まで議論は行われていた。大魔導士クラスの教師達を説得するにあたって学年主任だけがなかなか首を縦に振らなかったからだ。「万に一つ、いや、億に一つの可能性だが我々教師陣が彼らに負けたらどうするのだ。彼に高等魔法を教えねばなくなるではないか!」

「何をそんなにお焦りなのですか。ただ単に彼らに勝てばいいだけのことじゃありませんか。それとも先生は彼らに勝つ自信がないんです?」

「ぶ、侮辱は許さんぞ! だいたい貴様は学生の頃からろくでもない面倒ばかりを我々に押し付けおって! 大人になって少しは大人しくなったかと思っただけ——」

「面白そうじゃないか」

ようやく起きてきたか。

グラッツはホツとしながら彼が職員室に入ってくるのを待っていた。

「さすが、戦闘関連のこととなると頭の回転が速くなるのは変わっておらんのお」

「ドクター、それは俺を褒めてくれているのですか？それともけなしているのですか？」

グラッツの問いかけにドクターエックスは「どうとつてくれてもかまわんよ」とひげを撫でながら答えた。

「新たな息子達が完成したので、その作動具合も兼ねて存分にやってくれい」

「そうさせてもらつよ」

「ムギギイー！さつきから話を勝手に進めおつて！まだ私はこの件について承認したわけではないぞ！」

「なんじゃい、ようは自信がないといっているのではないか。そんなにあの小僧共が怖いのかの？」

ドクターエックスはまるで挑発するように長いあごひげで主任の頬を叩く。

「や、止めなさい！」

「いいや、止めん。お主がうんというまでは絶対に止めん」

「わ、た……し、しかしですねドクター……ちょ、ちよつと……」

わ、わかり、わかりましたから髭で叩くのは勘弁してください」

「わかればいいんじゃない。もう少し粘っていたら魔法で髭を強化するところじゃったぞ」

ドクターエックスは満足げに笑いながら顎髭をさする。

「ドクターは確か、戦闘のトーナメントについて申請している最中なんだろう？なんなら、その試験もかねてみたら？」

「グラッツ、お主はやはりわしの心の友じゃ。よう、わしの心を読みおるわ」

「へへ、昔から悪知恵だけは働くからね」

「しかし大魔導士クラスの先生方の中から誰を選抜するんです？」
一人がそう言うとその場の教師全員がしんと静まり返る。

「候補がいないようにしたら、僭越ながら自分が出たいんですけど……」

グラッツの申し出に他の教師が一斉にグラッツを睨みつける。ただ一人を除いて。

「やっぱりお主の魂胆はそれかい」

「タハハ、やっぱりドクターには見抜かれていたか。久しぶりに俺も自分の力を振るいたくてさ」

「主任、異存はあるか？」

「うぐぐ……。グラッツ、貴様本当に負けんのだろうな？彼らは今やだいぶ実力が上がってきている。羽目はずせばお前とて……」

「それなら私がグラッツ先生のお守り役を買って出ましようか？」

「セ、セリカ先生！」

「グラッツ先生は攻撃魔法、私は補助魔法に優れていますしちょうど良いコンビかと」

『確かに』と他の教師達も頷く。

「決まりじゃな。ちょうどよいコンビではないか。いろんな意味でな」

「ド、ドクター……！」

「グラッツ先生、今日は一つよろしくお願いしますね」

「は、はい！こちらこそセリカ先生には傷一つつけさせません！」

「うふふ、頼もしいですね。それで時間はどうするのです？」

「放課後でどうじゃ？わしのほうでも色々と準備があるでな」

「わかりました。主任、勝手な振る舞いをして申し訳ありません」

「い、いやセリカ君が謝ることではない。と、とにかく担任のロバート先生はセシル・マトレウスにそのように伝えるようお願いしますぞ」

「はい！」

闘技場で時を待ちながらグラッツは今朝の会議のことを思い出していた。

（まさか、こんなにもうまくいくななんて思ってたぜ。それに…）

グラッツは横目で自分の隣にいる女性を見た。

（セリカ先生と一緒に舞台に立てるなんて夢のようだ）

「どうかしましたか、グラッツ先生？」

「い、いえ何でも！」

（この声、たまらなく可愛いなあ）

グラッツがとろけるような顔をしていられたのも束の間、約束の時間通りに彼らはやってきた。

第9話　大奮闘！高等魔法を奪え！　後編

放課後になり、僕はコロシラムの会場へと向かっていた。当然、コロシラム会場なのに話し合いで何かをすることはないだろうと判断し、戦闘の準備も万全に整えてきた。この間のように突然の不意打ちを喰らっても対応できるように。

「セシル！」

後ろから声をかけられ振り向くと、いつもの面々が揃っていた。

「皆！」

「セシル君、いったいどういうことなの？何でまたコロシラムに？」

「それは僕にもわからない。ただ、僕にとって重大なことらしくて

……」

「何なのだそれは？貴様、何かよからぬことをしたのではなからうな？」

「まさか！それはいつも身近にいる皆のほうがよく知っているだろう」

『……確かに』

全員が頷く。

「とにかくコロシラムに行こう。巻き込んでしまった埋め合わせは近いうちにちゃんとするから」

と言ったものの、みんなの疑惑はやはり解けなかった。僕も被害者なのに何だかすつかり僕が悪いみたいないな空気になっていた。

コロシラムの円形闘技場に入ると、今回はちゃんと人がいた。

「グラッツ先生！」

「よおセシル、来たな」

グラッツ先生は気さくに片手を上げる。その横には大魔導師クラス教師でもあるセリカ先生がいた。担当クラスが違うのにどうして一緒にいるんだろう？

「もうちょっと待ってくれよ。もう少ししたらドクターも戻ってく

と思うからさ」

やっぱり、今回のこともドクター絡みか。コロシアムに呼ばれた段階から予想していたから別段驚きはしないけどさ。

「グラッツ先生、もしかしてまたドクターエックスの実験のために呼び出したんですか？」

「半分はノエルが質問した答えに当てはまるな。だが、半分は違う」
「？」

僕達全員が首を傾げていると、はるか上空から枯れた笑い声が聞こえてきた。そして、何かが落ちてくるような気味の悪い音……。

ドズン！

落ちてきたのは一体の巨大ロボット。そして、その頭の上にはドクターエックスとなぜかフレッドさん。

「グラッツ、遅くなってすまんのお。お望みどおり警備員も連れてきたぞ」

「ほ、本当に空から落ちたつてのに生きている……」

フレッドさんは半ば放心気味の表情でぶつぶつとそんなことをつぶやいている。

「ドクターエックス！」

「おお、セシルか。よう来たな」

「ドクター、僕達をまた実験のモニターにするつもりですか？」

「半分はその通りじゃよ。ただ、もう半分はお主の学年主任より説明があるじゃろう」

「え？」

訳がわからない表情の僕に、ドクターエックスは観客席を静かに指差した。そこには担任の先生と、学年主任の先生が立っていた。

「セシル・マトレウスよ！これからお前が高等魔法を所持するにふさわしいかの試験を行う！今から行われる試合全てに仲間と共に勝利せよ！」

「な！？」

「そんな唐突な！」

「全ての試合に勝利すれば高等魔法を所有することを認める！異存はあるか？」

もちろん大アリだ。確かに僕は早く賢者になりたくて高等魔術の取得を巡って何度も抗議をしたが、こんなやりかただとは聞いていない。

「どうして僕の友人まで巻き込むんですか！彼らには関係のない話じゃないですか！」

「このやり方が汚いと言うか？しかし、この機を逃せば高等魔法取得の機会はないかもしれないぞ？」

くそ、脅しかよ…。

「セシル、受けちゃいなよ」

「マリノちゃん、何を言っているんだ。関係のない君達を巻き込んでまで僕——」

「関係ないなんて言うな！！」

マリノちゃんの気迫に僕の両肩がびくつと上下に揺れる。

「どうして関係ないなんて言うのさ。あたし達は友達じゃないの？仲間じゃないの！？」

「え…？」

気がつくと、マリノちゃんは泣いていた。どうして泣いているのかわからなかった。先生に対する僕の返答は間違っていたのだろうか。

「友達の一大事に力を貸しちゃいけないって言うの？」

「そ、そんなことは言っていないよ！ただ、僕は皆に迷惑をかけたくないから…」

「迷惑なんて誰が言ったのよ！だれも、迷惑だなんて言ってないじゃない」

「セシル君、私達も先生にあんなことを言われて驚いているけど、でも私はセシル君のためなら何だってしてあげたいと思っているよ」
「ノエルちゃん…」

「セシル君、一ヶ月前に魔物に襲われていた私を助けてくれたよね。」

私の迷惑をかばって助けてくれた。今度は私がセシル君の力になってあげる番だよ！」

「我輩、貴様には一つ借りがあったな。ならば、今それを返すという目的ならば少なくとも我輩には迷惑をかけたことになるまい？」

「ギルバートまで……」

「俺もいるぜ」

いつの間にかロボットから降りてきていた。

「フレッドさん……」

「皆、お前の仲間だ。お前のためにならどんなことでもやってのける」

「仲間……」

「今、お前がやることは何だ？」

「僕がやるべきことは……」

「この戦いに勝ち抜けば家族が救えるんだろ？ だったら迷うなよ。たとえお前が道を踏み外したって俺達全員が殴って止めてやる。だから、今は目の前の可能性に向かってしがみつけ。それがお前のやるべきことだ」

「セシルよ、決断は決まったか！？」

僕のやるべきこと、それは故郷にいる家族を魔法で救うこと。そしてそのためには早く賢者にならないといけない。そのためには——
「ここで試験をクリアしなければいけない！」

僕は観客席で立っている学年主任の先生を睨みつけた。

「受けます！ どんな試験だって乗り越えて見せます！」

「よく言った！ では、担任のロバート先生からルール発表をしてもらうのでよく聞いておくように！」

「セシル君、そして仲間の皆さん！ これから皆さんには実戦テストという形で全三回、連続で戦ってもらいます。武器、防具の選択は自由！ 各戦闘間の体力回復期間は設けません。なお、最後の三戦目のみ敵の全撃破ではなくリーダーの撃破を勝利条件とします。リーダーを倒した時点で勝利です。では健闘を祈ります」

ロバート先生が説明を終えたと同時にドクターエックスの指示で
コロシアムに十数体のロボット達がそれぞれの場所に配置される。
「来たぞ、皆準備はいい？」

「ああ！」

「もちろん！」

「全然オツケーだよ！」

「愚問だな」

「マリノちゃん……」

「うるさいわね。あんたはあたし達のリーダーなんだからね。しっ
かりやんなさいよね！」

「う、うん！」

「では、試合開始！」

ロバート先生の開始宣言を合図に僕達は向かってくるロボットの
軍団の中に飛び込んだ。

「なっ！いきなり敵の陣中に飛び込むとは！」

「いや、よく見てみる。ギルバートの銃撃で一度は固まった敵が四
散している。各個撃破というわけか」

僕達はまずギルバートの銃で固まってやってくるロボット達を分
断させた。如何に防御が硬いロボット達でも僕の魔法とフレッドさ
んの槍を併用すれば簡単に倒せる相手だ。

「なるほど、ギルバートを敵の威嚇、扇動、そして後ろの女生徒達
の壁として立てたか。しかし、わしが改良した機械達を全て倒すの
にはそのくらいの作戦ではいささか問題があるのではないかのぉ」

くそ、このロボットは素早いな。攻撃がまったく当たらない。

「あ……！」

「しまった！」

なんて柔軟な機械なんだ。僕達の武器の合間をすりぬけるなんて。

「ギルバート！」

「ぬかりはないわ！」

ギルバートには僕とフレッドさんの包囲網を抜けたロボット達へ

の足止めを任せている。その間にマリノちゃん達の魔法が火を吹くわけだ。

「スパークダンサー！」

リプルちゃんの雷魔法は面白い特徴を持っている。球状にした雷の魔法は対象に向かって飛んでいかずに地面を伝っていくのだ。

バシン！

見事、僕達の包囲網を抜けたロボットを捕らえた。しかし、威力が低すぎて致命傷を当たるには至らない。

「きゃう！」

「ぐぬうー！」

ギルバートとマリノちゃんがロボットの放電攻撃を喰らい悲鳴をあげる。

「二人とも！」

「くるなセシル！作戦が狂うわ！」

「で、でも…」

「いいからお前はフレッド殿と前を守れ！ここは我輩が何とか食い止める！」

「くそ…」

僕達が劣勢になった途端ロボット達の攻撃が激しくなる。このままじゃ一試合目からやられてしまう。

「早くも劣勢じゃな。いささか強い者を送りすぎたか？」

つまらなさそうに試合を見守るドクターエックス。その横ではグラッツが真剣な表情で試合の行く末を見守っている。

（セシル、お前の力はそんな程度ではなかっただろう？）

何とか突破口を切り開かないと。でも、これだけ素早いとアロー系魔法でも当たるかどうか怪しい。闘技場全体を一度に攻撃できるものがベストだが、囲まれている今だとそれは難しい。となれば、僕の周囲の範囲だけでも消し飛ばせるような形に限定される。周囲を一度に吹き飛ばす、そう風のように！

「サンダーストーム！」

竜巻のように渦状に回転しながら雷の嵐が僕の周囲に発生する。渦に飲まれた機械達は雷にその体を碎かれてそのまま地面に落下した。

「うわわ、俺を巻き込むんじゃない！」

フレッドさんを巻き込んでしまったのは予想外だったけど、これで僕の周りの機械達は一層できた。あとはギルバート達の応援だ。

「鋭く研ぎ澄まされた光の刃よ。ここに集え！シャインセーバー！」
いいぞ、ギルバート達を攻撃することに夢中になっている今なら絶対に命中する。

「碎け散れ！」

「ふむ、背後を取るとはやりおったな」

光の刃は機械達を数回斬り裂き、虚空へと去っていった。

「よくやった。一回戦は突破じゃ！続いて二戦目、開始！」

観客席からドクターエックスが高らかに宣言する。コロシアムの入り口からいつから待機させてあったのか、魔獣の軍団が僕達に迫ってくる。

「ちょ、マジで休む間もくれないのぉ！」

「ぼやくなよマリノ！もう少しの辛抱だ」

「は、はい！」

フレッドさんに激励され、何とかやる気を持ち直してくれたマリノちゃん。やっぱり好きな人の力は大きいなあ。

「さあ、次は魔獣の軍団じゃ！タイプはお前達が戦ってきたものと同じじゃが、大幅なパワーアップがされておる！どう切り抜ける！？」

「セシル、こいつらに打撃は効きにくいぞ！我が銃も牽制程度にしか使えない！」

「防御力も上がっているのか！？」

「牽制ができれば十分だ。近づいてきた奴は俺が引き受ける！」

「お願いします、フレッドさん！」

打撃が効きにくいのならばとるべき手段は一つだけ。

「魔法できりきり舞いにさせてやるんだ！」

「任せて！」

ノエルちゃんが唱えた氷柱の魔法が魔獣達の頭上を駆け抜ける。

「何度も戦ってずっと思っていたの。爬虫類なら寒さに弱いはずだ
って！」

なるほど、今の今までそれには気がついていなかった。ずっと必
死で戦ってきたからね。

「我が魔力により生まれし氷よ。我を守る殻となれ！ブリザードシ
エル！」

マリノちゃんはなんと冷気を自分の体の回りにまとうことで魔獣
達と距離をおくことに成功していた。加えて、彼女がナイフで攻撃
を加えるときも周囲の冷気がナイフの攻撃力を引き上げる効果を生
み出していた。

「こりゃいいや。皆もやってごらんよ！」

ナイスアイディアだ。僕達魔術士が全員氷を身にまとうことによ
ってかなり有利に戦えるようになった。この調子なら二戦目は楽に
突破できる。

「そうくると思っておったわい！そのための対策もちゃんとこつち
で練っておる」

冷気を身にまとい楽勝が約束されていた二戦目だったが、それを
覆したのが後ろから現れた赤色の魔獣。寒さをもつとせずに僕達
に体当たりを仕掛けてきた。さらには火を吹き、僕達の冷気を意図
も簡単に消し去ってしまったではないか。

「氷のバリアが……きゃあ!？」

呆気にとられているのも束の間、ノエルちゃん達が赤い魔物の襲
撃を次々と受けていく。まずは体力の少ない者から戦闘不能にさせ
るつもりか？おまけに僕達が助けに向かおうとしても炎のブレスを
吹かれ、こちらも足止めを喰らってしまう。

「あち、ち……！こいつら、集団でわらわらと火を吹きかけやがって
……！」

兵士であるフレッドさんは魔法に対する抵抗力が極端に薄いことをこの魔物達は知っているというのか。さすがドクターエックスが手がけた魔物達だ。頭の良さまで引き上げられている。

「感心している場合か！」

「痛いよう！早く助けてー！」

くそ、このままじゃ手も足も出ない。奴らのプレス攻撃が続く限りこっちも炎に阻まれて動くことができない。

（今度こそ駄目か…）

自分達の敗北を覚悟した時、同時に敵の炎攻撃も止まった。いったいどうしたというのだろうか？それに、何だか動きが鈍くなつてきている。

「まさかこいつら、炎のプレスを吹き続けて体力がなくなつたのか？」

まさに運が呼んだ奇跡だった。炎を立て続けに吹き続けて僕らの邪魔をしていたがために力を消耗して歩くことすらおぼつかなくなつてしまっている。

「よくも散々邪魔をしてくれたな」

僕はここぞとばかりに体力を失った赤色の魔獣を剣で斬る。

「こんなところで立ち止まるわけにはいかないんだよ！」

最後は弱点の氷属性の攻撃魔法を放ち、魔獣の軍団を全滅させる。

「ハアハア、何とか勝ったぞ…」

僕達は既に全員ボロボロだった。もう立っているだけでも相当辛い。しかし、三戦目の相手は容赦なく空中から降ってくる。三戦目の相手は一戦目の機械達と二戦目の魔獣達がタッグを組んでくるのか。でも、弱点は知っているからたいした相手ではないはずだ。しかし、問題なのは三戦目で撃破すべきリーダーの存在。

「グラッツ先生！それにセリカ先生まで…」

「まさかあの二人がリーダーなの！？」

「そんなあ、勝てっこないよお…」

「泣き言を口にするな！たとえ勝算がない相手でもやらねばこちら

「がやられるのだぞ！」

「ギルバートの言うとおりだ。安心しろ、ちゃんと手加減はしてやる」

グラッツ先生はそう言ってギラリと光る斧を見せる。

「奴の得物は要注意だな」

「そうだな。あんな大斧を武器で受け止めようものなら一発で粉々になっちまう」

フレッドさんの額から脂汗が滲み、頬を伝う。

「リプルちゃん、今のうちに皆の回復をお願い。皆、なるべく機械と魔獣は無視するんだ。グラッツ先生を倒せば全ては終わる！」

「かなりヘビーなお願いだけどやるっきゃないわね」

マリノちゃんが乾いた笑みを浮かべる。

ノエルちゃんも硬い表情で何とか頷いていた。やがてリプルちゃんがかけてくれた回復魔法がきき、僕達の体力は完全に近いところまで回復していた。

「流石に、全員を完全回復は……しんどいよう」

体力は回復したが、リプルちゃんがついに立つ力を維持できなくなり座り込んでしまった。その時点で戦闘不能が確認され、リプルちゃんはタンカーに乘せられて救護室へと運ばれていった。彼女は最後まで僕に「ごめんね」とつぶやいていた。しかし、ごめんねと言わなければならぬのは僕のほうだ。リプルちゃんのためにも、この試合に勝ってみせる。

「回復役のリプルがいなくなったのは正直辛いところだな……」

「確かに。慎重に行動せねば即お二人の餌食になってしまう……」

あまりにレベルの違いすぎる相手を目の当たりにしているためか、皆の動きがかなり硬い。弱点がわかっているはずの相手にも必要以上警戒してしまっている。これじゃ、回復してもらった体力をザコで使い果たしてしまう。

「最後の力を振り絞ってかけてもらった体力回復もあの動きでは無意味に終わってしまいそうですな」

学年の主任はニヤニヤと笑いながら余裕の表情で戦局を眺めている。

「坊主、このまま終わってしまったってよいのか？」

このままで終わりたくない。皆のリーダーとして何とかメンバーの恐怖を取り除いてあげないと。

「はぁ……！」

僕の気合を入れた一撃が人型ロボットの体を縦二つに両断する。

「何と言う奴だ。機械人形を一撃で……！」

「皆、ひるんじゃ駄目だ！戦場に立てば強い敵と対峙するときだつてある！その度にそんなへっぴり腰では絶対に駄目なんだ！」

「セシル……」

「僕達が今までの闘いで得たものを思い出して！それをグラッツ先生にぶつけるんだ！」

僕は剣を振り回して敵を攪乱しながらがむしやりに叫んだ。皆、お願いだから最後まで諦めないで。

「セシル、わかったよ！」

最初に戦列に参加してくれたのはフレッドさんだった。

「いつだつてお前の目は前を見ていた。どんな局面でも決して退くことを考えなかった！」

ドン！

ギルバートの銃が魔獣の群れを分断させる。

「最初の印象はただの優男かと思っていたが、さすが我輩が認めた男だ。このギルバート、今はお前のためだけに全力の力を出そう！」

「ギルバート……」

カッ！

背中の中で強い魔力の流れを感じる。

「ノエル、行くよ！」

「うん！」

これは、二人の協力魔法？

『雷の暴徒、その力を存分に見せつけよ！ギガブレイバー！』

二人が放った稲妻の剣が真上から魔獣やロボット達に降り注ぐ。その凄まじい魔法は敵の核を全て一撃で貫くほどの威力だった。

「賢者への道はすぐそこだよ！」

「セシル君、手を伸ばして！」

「ああ！目指すはグラッツ先生だ！」

「おう！」

「心得た！」

僕達は魔物達の屍を踏み越え、中央のグラッツ先生のところへと一気に突撃する。

「久しぶりだぜ。この感覚、この快感……」

グラッツ先生がつぶやくながら微笑む。

「セシル、俺も全力でお前を潰しにかかるぜ！」

ついに、戦闘が始まってから闘技場の中央で微動だにしなかったグラッツ先生が動いた。セリカ先生もバックステップで後ろに距離をとり、魔法詠唱を開始する。

「ギルバート、まずは足を狙おう！」

「おう！」

僕があらかじめ唱えておいた雷の矢、それとギルバートの銃弾がグラッツ先生の足元目がけて飛んでいく。

「甘い！」

グラッツ先生は急停止すると、斧を振りかざした。それにより魔法は風圧で消え去り、銃弾は斧によって二つに裂かれた。

「魔法がかき消された！？」

「あの速度の弾を見切ったと！？」

「どちらにせよ、常人のなせる業じゃない。

「いやあー！！」

ガキーン！

フレッドさんの槍とグラッツ先生の斧が激突する。

「騎士の貴方とは一度刃を交えてみたかったんですよ」

「奇遇ですね。俺もグラッツさんと同じ事を考えていましたよ。事

件処理の時の斧捌きはよほど鍛錬されたものと見える」

「フレッドさんの槍もこうやってじかに受けてみると……違いますね」

グラッツ先生とフレッドさんは押し合いながら何かを話しているけど、いったい何を話しているんだろう。心なしか両者の間には笑みがこぼれている。

「呑気に試合を観戦していて大丈夫？」

「……！」

しまった！

「ごめんねセシル君、貴方にはまだ高等魔術を教えるわけにはいかないのよ」

「僕が、皆とは違った目標を持っているからですか？」

僕の問いにセリカ先生は答えず、代わりに雷の魔法が僕たち全員に降り注いだ。声にならない痛みが全身を襲う。これが、魔術教諭の資格を得た人達の真の実力なのか。まったく……齒が、立たなかった。

「セシル……！」

「戦闘中によそ見はいけませんよ、フレッドさん？」

（しまった！）

フレッドが気づいたときにもう遅かった。グラッツの振り下ろした斧がフレッドの装備していたアーマーを軽々と引き裂いたのだ。

「フレッドさん、次は生徒達なしの対一で勝負したいですね」

倒れる間にグラッツがそんなことを言っていたような気がした。しかし、フレッドにそれをはっきりと聞き取る力は残っていなかった。

最終話　歩むべき道

僕達の試験は終わった。気がついたら保健室のベッドに皆寝かされていて、敗北が伝えられた。フレッドさんも僕達がセリカ先生の魔法でやられた後、すぐにグラッツ先生の斧を受けて気絶してしまつたらしい。マリノちゃんが顔を真っ青にしていたが、鎧をつけていたため体に外傷はないようだ。

「よかった…。フレッドさんが酷い怪我だったらあたし…」

「心配させてすまなかつたな。でも、俺はこの通り大丈夫だ。マリノ達は？」

「あたしは平気です。先生が手当てをしてくれてるし、もともとたいた怪我もなかつたですから」

あれだけの戦いだったというのに前衛も後衛も含めて皆、切り傷や打撲などの比較的軽い怪我だけで済んでいた。

「ところで、グラッツ先生って昔何か武術をたしなんでいたとかそういう話はないのか？」

「グラッツ先生にですか？聞いたことないですけど」

「あの人はもともとこの生徒だったらしいですよ。あんまり素行はよくなくなつたらしいです」

「ノエルちゃん、詳しいねえ」

「他の先生が職員室で愚痴を言っているのをたまたま聞いちゃったの」

「なるほど！」

「でも、どうしたんですか急に？」

「いや、魔法使いの学校って言うからには体力面にはあまり自信のない人が多いのかなと思っていたから、あんな手誰に出くわすと思つてなくつて。それで興味が湧いてきたただだよ」

フレッドさんは「全然かなわなかつたけどな」と悔しそうに笑っていた。

「俺の完敗だったよ……」

完敗……か。

フレッドさんも言ってからしまったと思ったのだろう。言い終わってからハツと口に手を当てた。

「皆、ごめんね。僕のせいでこんな痛い目にあわせてしまって。僕が先生達にわがままを言ったから……」

「もう、それはいいんだよセシル君。私達は皆自分の意思でセシル君に協力したんだもの」

「そうそう。あんたは何でも気にしすぎなの。もっとドーンとしてなさいよ」

「でも、結果的に負けて……」

「ああ、もう！それは言いつこなし！今回は負けちゃったけど次を頑張ればいいじゃない！」

「次なんてあるわけないだろ？あれはきつと僕に身の程を教えるために先生達が仕組んだんだと思う……」

「残念だけど、それは違うぜ」

保健室への突然の来客に僕達は言葉を失った。

「傷の具合を見に来たのよ。でも流石ね、二時間寝ただけで完全に回復しているなんて」

「セリカ先生の手当てがよかったからですよ」

「そんな……。グラッツ先生も手伝ってくれたじゃないですか」

「じ、自分の手伝いなど手伝ったうちに入りません。全てはセリカ先生のお力です」

「グラッツ先生ったら、私をおだてても何も出ませんよお？」

何だ、このポケポケカップルみたいなフリは。この人達、わざわざこんなコントを見せにやってきたというのだろうか。

「あゝゴホン。今回の試験はな、実は俺が考えたことなんだ」

「グラッツ先生が！？」

その事実には正直かなり驚いた。てつきり、学年主任が僕への身の程をわからせるために仕組んだものだとばかり思っていたのだが。

「セシル、昨日の晩のことを俺は聞いてしまっていたんだよ」

「え？」

「お、怒らないでくれよ。偶然、聞いてしまったただけなんだ。就寝時間が過ぎているのに大声がしたから様子を見に行った時に……」

「いったい、どの辺りから聞いていたんですか？」

「多分マリノの話が出た辺り……だったと思う」

グラッツ先生の返答にマリノちゃんが「あたし？」と自分を指差して怪訝そうな顔をしていた。

「事実上、魔法の世界では大魔導師クラスの次は賢者ということになっている。だが、飛び級をしながら一気に賢者になった者というのは数えるほどしかない。それは魔法力を養う期間がどうしても他のものより短いからだ。どんな信念を持っているやつでもそれだけは拭えない壁だ」

「ダイゴ先生の仰っていたことも最মন的のだけど、それだけが問題というわけではないの。魔法力を養う訓練というのは一番難しい……というより短期間で養う方法が今のところ見つかっていないのよ」

「そんな……。じゃあ、今の僕にはどうあがいても高等魔法は手に入れないってことですか!？」

「まあ、お前にとつては辛い結果だろうがそういうことだ」

「私が貴方達を倒した魔法。あれは高等魔法を縮小化して放つたものよ。通常、魔法は効力が及ぶ範囲を広げようとすると必然的に威力は極端に低下してしまう。攻撃魔法を何度も使ってきた貴方達ならわかると思う。あの範囲のあの威力を出すにはそれだけ大きな魔法力が必要になる。もちろん、それを操ろうとするならそれ以上にね。高等魔法は攻撃魔法だけじゃないから必ずしも全てに多大な魔法力がかかるわけではないけど、少なくともこればかりは経験と実力がものを言うわ」

「ダイゴ先生が話していた生徒会長の話だつてそうだ。今の研究を始めるまで、あいつはあまり目立たない子だったんだぞ？その頃は生徒会にも入っていなかったしな。なあセシル、金を稼いで幸せに

してやることだけが家族を守るってことじゃないだろ？物理的に守ってあげる力も必要だ。今のお前や、マリノ達は確かにファトシュレーンの中では強豪といえる部類だ。しかし、お前が目指しているのは学校で一番になる力なのか？そんな力がほしくて賢者になりたいのか？」

「……いいえ」

「どうせならこれを機会にもっと闘いへの道を究めてみたらどうだ？さつきセリカ先生の話で魔法力を高める方法のことがあげられたが、魔法協会でも最も注視されているのは闘いによって魔法の経験を積んだ者のほうが魔法力の高まりが早いという事実なんだ」

「そうなんですか！？」

「闘いの裏には悲しみや怒りといった感情的なものがある。それらが魔法力を高めているのではないかとも言われているわ」

「まあ、何にせよ今のお前に必要なのは魔法力向上のための訓練ということだ。そして、その訓練として一番適しているのが戦闘を繰り返すということになるだろう。幸い、ドクターエックスが最近また何やら企んでいそうだからな。近いうちにお前達にもまたお呼びがかかるんじゃないか？」

「えー！？」

マリノちゃんが露骨に嫌そうな顔をする。

「何だ、マリノは戦いが嫌なのか？そんな素振りは見せたことなかったようだけど？」

「戦いは嫌じゃないけど、ドクターエックスにこき使われるっていうのが何だかなあ」

「でも、それで強くなれるのだったらいくらでもやりますよ。賢者になるために、僕はもっと強くならんくちやいけない」

「日々精進あるのみ……だな？」

「ギルバート……」

「ふん、勘違いするなよ。我輩はドクターエックスに付き合えば戦いで己を鍛えることができるというところに賛同しただけだ。貴様

が賢者になるのを助けるわけではないぞ？」

「うん、それでも僕に付き合ってくれてありがとう」

「ふ、ふん！」

ギルバートが珍しく顔を朱に染めている。じっと見つめていたら機嫌損ねてそっぽを向いちゃったけど。

「なあセシル、俺も戦いに参加させてはくれないかな」

「フレッドさんも？」

「ああ。最近は事件のこともあつて忙しかったけどやっぱり騎士の俺にとって闘いが無いというのは体がなまってよくないしな。も、もちろん警備の仕事が空いている範囲内だけどな」

セリカ先生の視線に気づいたのかフレッドさんは慌てて言い繕った。

「フレッドさんがやるのならあたしもやる！」

やっぱりマリノちゃんも乗っかってきた。ほんとフレッドさんに弱いんだからなあ。でも、それでもすごくありがたかった。

「ノエルもリプルも参加するでしょ？」

マリノちゃんはあたかも「参加しろ」と言わんばかりの目で二人

を見ている。

「う、うん……」

「全然いいよ……」

と言っている二人の顔はどう見ても自信がなさそうだ。

「二人とも、こんな僕の勝手な事情に無理をして付き合ななくてもいいんだよ？二人が戦いをあまり好んでいないことはよく知っているから」

「そ、そんなことないよ！ただ、あたし達セシル君の足手まといになるならいいほうがいいのかなと思って……」

「二人が足手まといなものか！今までだって何回も僕を救ってくれたじゃない。ノエルちゃんとリプルちゃんが支えてくれたから皆でここまでこられたんだよ。僕の仲間の中で足手まといなんて誰一人としていないよ。皆、大切な仲間なんだ！」

「セシル君、本当に私たちのことをそう思ってくれていたんだ……」
「もちろんだよ。これからもずっと、ね？」

「うん！」

「ありがとう！」

こうして、僕は志を同じくした仲間^{パーティ}を持ったのだ。

その夜、僕達はパーティ結成を記念して祝賀パーティを開いた。
途中からグラッツ先生やセリカ先生、寮長さんやラウナちゃんも入
ってパーティは大いに賑わった。ギルバートなんか酒に飲んで百八
十度キャラが変わっていたっけ。途中から脱ぎだしてもう大騒ぎだ
った。

「あゝあ、もつとパーティやっていたかったなあ……」

宴が終わって、寮に帰る中マリノちゃんはずっと同じ言葉を繰り返
返していた。

「無理言わないの。明日も普通どおり授業があるんだから」

「ちえゝ、つまんないの」

マリノちゃんはぶうつと頬を膨らませる。何だか、今日のマリノ
ちゃんはちよつと可愛く見える気がする。

「ねえ、セシル？」

「何、マリノちゃん？」

「これで、よかったの？」

「何が？」

「だから、あたし達とパーティなんか組んじゃって良かったのかっ
て聞いているの。その気になればセシルは大魔導師クラスの人達と、
同じクラスの人達ともパーティを組めたわけじゃない？あそこで急
いでパーティを決める必要なんて……」

「急いで決めてなんかいないよ。同じクラスの人達ともパーティを
組もうなんて考えもしなかった」

「どうしてよ？ 実力は明らかにあたし達より上の人達ばかりなのに。ノエルやリプルじゃないけどさ、あんたの足手まといにはなりたくないんだ。あんたが賢者にならないといけない理由を知っているから……」

「もういいんだよ。理由を話したら母さん達もきつとわかってくれると思う。事件が起こってからずっと思っていたんだ。マリノちゃん達と街や誰かを守るために戦っていくたびに僕は君達のことも守ってあげないと、考えるようになったんだ」

「セシル……」

「マリノちゃんや皆は僕の大切な人だから守ってあげたい、て」

「あんた馬鹿だよ。本当に、ほんとに大馬鹿だよ。でも……ホツとしちゃった」

「マリノちゃん……」

「遠い村から入学してきて、知っている人がいない中あんたと出会って、どっちが先に賢者になるかなんて言って競争してたよね」

「今でもそのことは覚えているよ。昇級試験のたびに僕のことを目の仇のように睨みつけてさ」

「あれはこれから勝負よ、て儀式だったの！ ま、結果はこの通り惨敗だけだね」

「それはどうかな。僕が賢者になるのはまだまだ先の話になりそうだからマリノちゃんにもまだチャンスはいっぱいあるよ」

「へへ、そうだったね。まだわかんないよね。よくっしセシル、見てなさいよ！ すぐにあんたに追いついてやるからね！」

「期待しないで待っておくよ」

「このお！」

マリノちゃんがふざけて僕の背中を叩く。ちなみにグーで……。昔からいつも全力疾走の子なんだよなあ。これじゃ本当にすぐ追いつかれてしまうかもしれない。

「ん？ 何か言った？」

「何にも言ってません」

たまにはこうしてのんびりしていてもいいよね。
いいよね、ミーナ。

END

あとがき

本格派魔法学園ファトシュレーン、いかがだったでしょうか。

新城寺ハヤトです。

別にあとがきを書けとは言われてませんがワタクシが非常に書きたいので独断で書きちゃおうと思います（死ね）

まず、この作品を書くにあたってですが、私が書くファンタジーってのは基本的に主人公が何かに遭遇して世界をまたにける大事件に巻き込まれるとかそういうのが多かったんですね。だから、登場キャラクターはメイン意外はほとんど、細かい設定がなされていなかったんですよ。それに世界を舞台に動かそうとすると話が大きくなりすぎて、内容が希薄になる感じが否めなかったんです。もちろん、その要因の一つには私の表現力、文章力も大いに関係しているとは思ってます。そこはもっと精進するとして……。

とにかく、もっと登場人物はメイン・サブ含めて存在感を出そう。そのためには何か一つの場所で大きな目標を達成させるのがいいなと。それが魔法学校であり、ファトシュレーンであつたわけです。賢者を目指して魔法を学んでいくこの学校、実力主義というところがキーポイントになっていたりします。知識だけ、あるいは実力だけでは魔法の世界は渡っていけない。魔法が使えても、その魔法を放つ力がなければ実戦で泣きを見るだけです。

実社会でもそうですよね。たとえ何らかの資格をとっていてもそれだけでは意味を持ちません（就職などステータスにはなりますが）実践して経験していくことで初めて資格は意味をなすと思います。

話が少しずれましたが、セシルにはこれからそこところをよおく学んでいってもらわなければなりません。しかし、彼には彼を支えてくれる仲間がいます。彼らと力を合わせて一刻も早く、家族のために賢者になってほしいと思っています。たとえ彼が魔法世界では外道といわれている存在になつたとしても。

セシルは今後、仲間たちとどんなことを経験し、学んでいくのでしょうか。

果たして彼は賢者になってファトシユレーンを卒業できるのでしょうか。

仲間たちの目標は実現できるでしょうか。

今はまだわかりません。

登場人物紹介

あとがきに引き続き、主人公を含むファトシユレーンの登場キャラクターについて紹介していきたいと思います。あのキャラが気になるとかあったりする人、新城寺はキャラ設定にこんなことを書いているんだなど知りたい人はぜひ見ていってください。では、どうぞ！

『主人公』

セシル・マトレウス（16歳）大魔導士

貧乏な実家を救うために金になるらしい魔法を習得するためにファトシユターン魔法学校に在学している。成績はかなり良いほうで飛び級も果たしているのだが、いくら待っても高等魔法を教えてくれない学校に嫌気が差し、学校を辞める決意を固めていた。根っからの善人で困っている人を見ると助けずにはいられない。どちらかというと女顔よりの顔なのでたまに女の子と見られることもある。

『周りの人々』

マリノ・オルスカーナ（16歳）上級魔術師5級

セシルとは同期でファトシユターンに入学した明朗活発、健康優良少女。明るくさばさばとした性格は男女共に受けがいい。魔法学校に入学したきっかけは幼い頃に魔法を使って芸をしている旅人を見かけてその場の勢いで弟子入りしようとしたのだが、その旅人にこの学校を卒業したら弟子にしてあげようと言われたからである。

ノエル・ハミルトン（16歳）上級魔術師4級

マリノの友人で、学校には実家から通っている。ちなみに実家は銘菓店。マリノとは対照的にどちらかというと内気で大人しく、一步控えめな態度が目立つ。魔法学校に入学した理由は幼い頃に魔力が

あると言われたことがあったことから自分の実力を計るために両親に無理を言い、家業のほうと両立するという約束で入学。マリノを自分の大事なパートナーとしてみている。

フレッド・バスター（25歳）

ファトシユターン魔法学校の若き警備員。魔法学校の警備員だが、聖王都バレルから派遣された兵士のため魔法は使えない。魔法学校の良き兄貴分として生徒達（特に女子生徒）に慕われている。性格は真面目だがたまに予期せぬ大ボケをかますこともある。

リプル・エルバーム（13歳）高等魔術師7級

魔物に囲まれていたところをセシル達に助けられた女の子。この子もまた級を飛ばしており、セシルの一つ下、マリノ達の一つ上の階級に所属している。まだ幼いリプルがここまで頑張るのは父の期待に答えるためという理由から。外見は年齢よりもっと幼く見えてしまったため、周囲の人間は彼女を子ども扱いするのだが、本人はそれほど嫌ではないらしい。

ギルバート・セルバティス（21歳）

どこか別の戦士養成学校から特別任務として命じられてファトシユレーンにやってきた軍人肌の男。ガチガチの石頭的な考え方になかなか馴染めずにいるが……。

寮長さん（17歳）高等魔術師2級

魔法学校男子寮の寮長を任されていると同時に生徒会生活指導員でもある。典型的な地味めの眼鏡君だが、嫌味なタイプではない。厳しいが、寮生の相談に乗ったりする面もあることから周囲の受けはいい。ちなみに彼は10歳の頃からファトシユレーンで魔法を学んでいる。

ラウナ・クロスヤード（14歳）中級魔術師6級
ファトシュレーン魔法学校生徒会役員に任命された少女。魔術師としての力量はまだまだが、はるか東の文化に興味を持っており茶道や弓術などが得意。また、戦闘訓練のカリキュラムが導入されてからは刀という独特の剣の勉強もしているらしい。生徒会書記に所属している。

グラッツ・ロツソ（26歳）

マリノとノエルのクラス担任で元セシルのクラス担任。実はファトシュターン魔法学校の卒業生で、二年前に教師の資格を得てここに戻ってきた新任教師。まだ若いためか非常に生徒想いで人気が高い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4758b/>

本格派魔法学園！！ファトシュレーン

2010年10月8日13時19分発行